







地理學小品目序

地理學小品は余か平生地理學習の際天然に觸れ人事に接し隨時隨感乃ち筆を驅りて地理的に觀察し地理的に解釋したる小品文なり今茲に民友社に於て發刊の舉あるに際し頗る訂正を施したれども尙ほ恐らくは及ばざる所多からんことを觀者冀くは微意の存する所を看取し其瑕瑾を恕せば幸甚と云爾



(一)

明治三十五年西南氣候風を浴しつゝ 著者識







地震國... 一二三頁

表日本及裏日本(圖入)... 一三九頁

自由風... 一五三頁

我國に襲來する暴風雨(圖入)... 一六〇頁

晴れの半面雪の半面(圖入)... 一七五頁

政治地理... 一八六頁

關東及關西... 一九九頁

湘南名勝... 二一〇頁

青年の夏季登山... 二二五頁

日本の最寒地... 二四六頁

第十九世紀末の回顧... 二五三頁

看よ宇宙... 二九七頁

地理學小品目次 終

地理學小品

富士山

矢津昌永著

或る場合に於ては我帝國を代表し又我國民の氣質を代表すべき富士山も單に之を地質的に解釋すれば頗る殺風景なれども之に少しく芙蓉八朶の美術的觀察を加味すれば又甚だ趣味ある一大名山なり予茲夏箱根より足柄嶺を踰へて再び富士登山の客となれり東海道鐵道開通以來登岳の客は多く御殿場驛に集り是より躋登の途に上るに至れり從來富士登山の路は四途あり東海道よりは駿河國富士郡大宮より



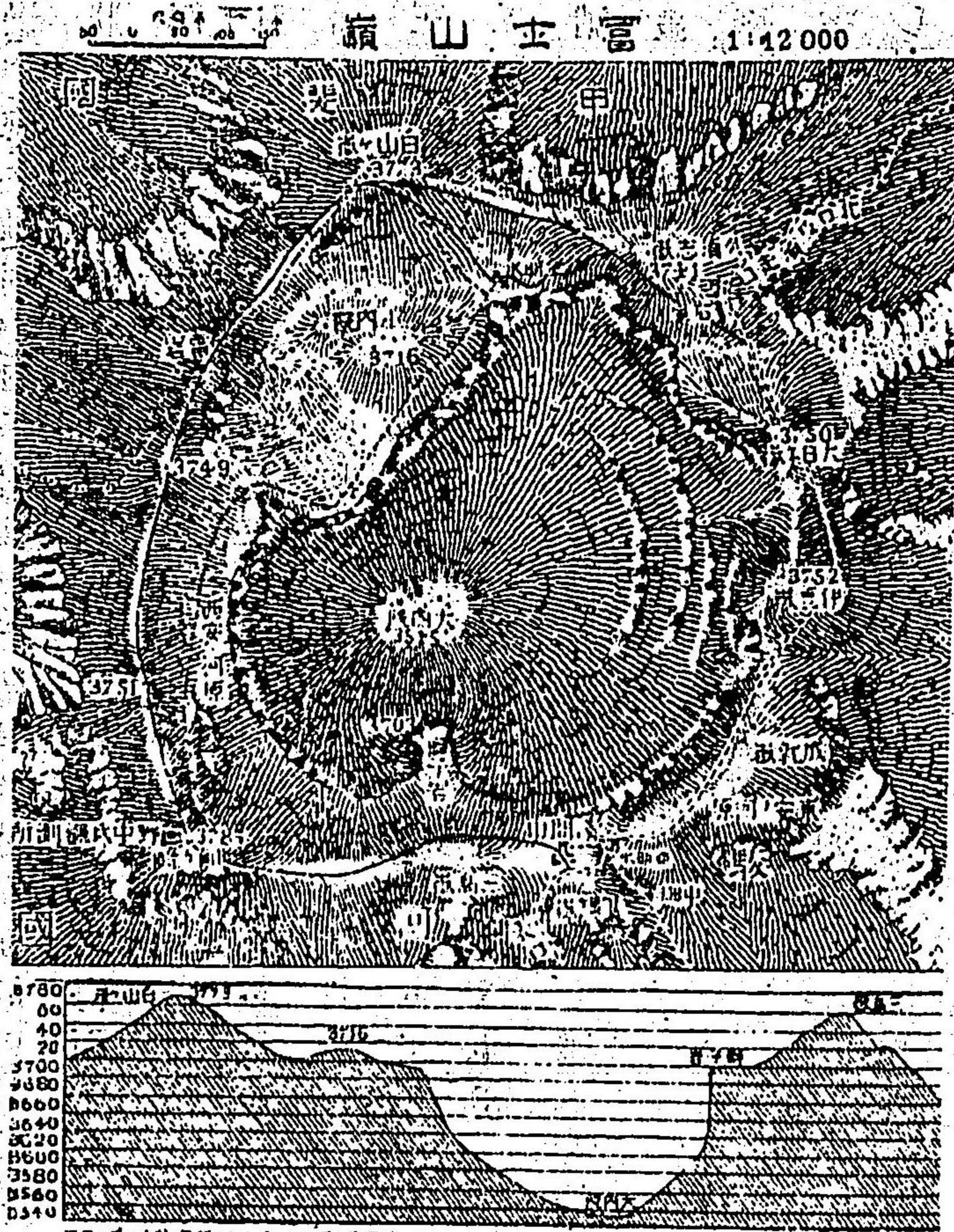
するものにして、之を大宮口又表口と稱す、又駿東郡須山よりするものは須山口と曰ひ、同郡須走よりの道は之を須走口と稱し、或は共に東口と曰ふ、又甲州谷村を経て吉田よりするものあり、之を吉田口又は北口と曰ふ、然るに近來御殿場より太郎坊を経て、東口に合する一道を開通し、登岳の客は此途を取るもの最も多きに至れり、故に夏期登岳の候、御殿場の繁榮は實に甚しく、白衣道士の群集する景況は身恰も朝鮮に客たるの想ひあり、御殿場驛は富士山と宮根山彙との峽間恰も藥研底的の凹所に在れとも、其高度は海拔一千四百八十五尺にありて、富士箱根の兩火山より噴出せし火山岩屑滿地に布けり、今の東海道鐵道線路は藥研底を追ふて沼津に出るものなり、

太郎坊以上は玄武岩若くは富士燒岩と稱し、富士全山を組織する熔岩の屑礫を以て覆はれ、其麓の傾斜緩なる所には松、落葉松、榲等の疎生林

あれとも、二合目以上は植物跡を絶ち、亦雜草一莖をも見ず、是れ蓋し傾斜の漸く急に、火山礫又漸く大となり、雪崩等の爲め、砂石轉流して其位置を定めず、草木の宿根すること能はざるによる、故に仰望寸青の眼を遮るものなく、八朶の芙蓉峯咫尺の間に望み得べし、抑々富士の形狀は丈山翁が既に評し盡せる如く、倒懸の白扇形をなし、其麓に於ては傾斜甚だ緩に、五度乃至十度に過ぎざれども、躡るに隨ひ其傾度を増し、凡一萬一千尺(八合目)以上は三十度乃至三十五度に及べり、山側の外形は直線を以て畫し、中腹稍々彎曲せり、是れ重力作用に由り、全山其中心に向つて漸次陷入せるものなりと云ふ、總て火山は概ね圓錐體をなし、其側面は多少彎曲すれども、其形の完全なるもの甚だ乏しく、南米の

コトバッキン火山及び墨西其のポポカテペトル火山の如きは倒扇狀と稱すれども、我富嶽の如き好狀態を以て抽立するものなし、是れ東洋





否世界第一の名山たる所以ならん

富士山を遠望すれば其頂上の稍と平かなるが如く、尖截圓錐形の觀あるは、頂上に噴火口を有すればなり、此噴火口は南北に稍や長き楕圓形にして長徑約一千八百尺、短徑一千六百二十尺に達し、周回半里餘に及び、此孔を内院と稱し、道者等の尊崇參拜する所なり、孔内には南縁の獅子岩東邊より降ることを得べしと雖も、火山礫、燒岩等磊落として頗る危険なり、孔底も亦燒岩を以て埋められ、其間には所謂萬古の雪を存し、堆積四五尺に達し、岩間よりは電柱大の氷柱垂るゝを見る、仰て孔壁の四周を望めば、燒餘の巉岩矗立削るが如く、崖崩れんとするの勢を示し、其觀甚た豪宕なり、噴火口の深さは東口拜所より五百四十八尺、劔ヶ峰より七百九十五尺なりと云ふ、火口の四周を擁するは所謂外輪山(Somma)にして其高きもの八峰あり、劔ヶ峯(南)、雷岩(北)、志良山嶽(北)、伊豆嶽



(東)成就嶽(南)駒ヶ嶽(南)獅子岩(西)三島嶽(南)是なり故に其狀恰も八瓣の藕花狀をなせり。劔ヶ峯は實に富嶽の絶頂にして海面を抜くこと一萬二千四百六十七尺あり。是を我帝國本土の最高點とす。

若し夫れ頂上に立ちて曠望を取れば、東海東山の峯巒は縦令へば其が兒孫の如く起伏して脚底に其高さを競へり。萬仞の嶺上一たび長嘯すれば十三州の山河相呼應するに似たり。雲霧時に來りて半腹を吞めば、觀望唯一白の雲界にして八荒漠々天地の間、我身邊以外亦一物あるなし。壯觀謂ふべからず、凡そ登岳の詩枚舉に遑あらずと雖ども最も其天真を道破せるものは彼の柏軒翁の

攀躋身似地行仙

長嘯振衣萬仞巔

下界雲埋如亂絮

半峯以上是晴天

なるべし。『半峯以上是晴天』實に然り。下界は雲霧の埋むる所となるも、半

峰以上は氣壓の甚だ低き爲めに水蒸氣は頂上を鎖すこと頗る稀なり。聞く柏軒翁は是を以て『半峰先生』の雅名を博せりとぞ。少頃にして雲霧再ひ山腹を吐けば、森羅萬象點々指顧の間に歷々たるの狀は、恰も開閉の幕ある一幅の「パノラマ」を觀るに異ならず。

劔ヶ峰には内外人の齊しく瞻望する野中至氏の氣象觀測所あり。觀測器械大率供備し優に一等測候所の資格を有せり。毎年夏期は中央氣象台員諸氏交々來りて觀測に従事せり。凡そ高層氣象觀測の必要は世の學者の共に認むる所なれども、必要と同時に甚だ困難なるが爲め、今日まで満足の結果を收めず。歐州にてはアルプス山中に觀測所を設くれば、我富士の高度に達せず。只々有名なりしは北米合衆國の「パイクスピーク」の頂上なる觀測所とす。同所は一萬四千二百三十三尺の高所にありしも、今は之を廢止す。されば野中氏觀測所を以て世界最高の觀測



所と謂ふべし、されば若し越年観測の目的を全くせば、亦世界中稀有の結果を得べし、一萬二千餘尺の高層は頗る特別の氣象にして七月中(以下)の氣壓は最高四百九十三耗より最低四百八十耗の間を昇降し大抵は四百八十七八耗とす左れば下層の平均氣壓(東京の)なる七百六十一耗に比して約二百七十七八耗低し即ち下界空氣より三割六分を減ずるものなれば、其結果として種々の異狀を感ずへし、顔色蒼白に變じて聲音低く、呼吸の如き下層に於て一分間に二十呼吸の者は二十七八呼吸を要し、且つ急坂を攀づるを以て甚た切迫し、大抵は頭痛を感ずべし、燃燒不充分なれども、水は沸騰し易く、炊爨頗る困難にして而も遂に熟飯を得ず、又七月中の氣温は最高十六度五より最低零下二度四に及べり、故に略々東京十二月の温度に匹敵せり、是を以て炎風七月下界氷を呼ぶの時重衾を被り爐火を擁して眠るべし、又風力は常に強く七月二

十日には一秒間風の駛度は三十二米一に達し未だ六米七以下を數へしことなし、されば頂上は常に暴風の力あるものと知るべし、富士山は有史以後も盛に噴火したる寧ろ新期の火山なり、斯る事には無頓着なる往昔にありても其噴火の事蹟は史に乗せたり、今噴出の序を追ふて之を列擧すれば

(一) 孝安天皇三年(西曆前390)二月三日より數月に亘りて天地震動風起り雲霧深くして四方晦冥なり其十月三日富士山現出す是れ富士山に關し史に乗せたる始めとす此記によれば富士山は忽然として噴起せしものゝ如し

(二) 清寧天皇三年(西曆590)三四月の交富士山焼け崩れ灰降る

(三) 天應元年(西曆781)七月駿河國言富士山下灰降り其及ぶ所木葉凋落す



(四) 延暦十九年(800) 六月駿河國言去る三月十四日より四月十八日に至る富士山嶺焼け盡は則烟氣暗暝夜は則火光天を照し其聲雷の如く灰下ること雨の如く山下川上皆紅色なり此噴火は實に激烈なる噴火にして熔岩噴出し所謂熔岩流の慘狀を極めしことは今尙其遺蹟に徴するを得べし人若し頂上より東北吉田口登山路の方向を望めば一條の熔岩遠く走りて吉田を覆ひ桂川に沿ひ甲州猿橋驛に達するを見るべし其間八九里の長流を以て流被せり其慘烈の狀追想すべし

(五) 延暦二十一年(802) 正月富士山晝夜燎け砂礫霰の如し此噴火も亦烈しく殆ど四五月に亘りしが如し其噴出物の爲め足柄路は全く杜絶されしを以て其五月始めて筥荷路(箱根)を開かれたりしと云ふ

(六) 貞觀六年(864) 五月駿河國言正三位淺間大明神焚け其勢甚だ熾に光炎の高さ二十許丈雷あり地震ふこと三度十餘日を経て火猶滅せず

焦巖を崩し砂石雨の如く煙雲鬱蒸して人近くことを得ず大山の西北に本栖湖あり焼くる所の岩石流れて海中に埋まる、遠さ三十許里、廣さ三許里、高さ二三許丈、火焰遂に甲斐國境に屬す

(七) 同年七月十七日再び焚け崗巒を焼き碎き草木土礫石流れて本栖西兩水を埋め海水熱して湯の如く魚鼈皆死し百姓の居宅海と埋まり或は宅ありて人なく其數記し難し兩海の東に河口海あり火焰起りて河口海に向ふ是より先地大に震動雷電暴雨雲霧晦く山野辯じ難く然して後此災あり以上二回のの激烈なること想ふべく彼の伊太利のシエスピヤス火山の大噴火にも劣らざりしなるべし富士山の陰にある本栖精進西山中の四大湖は往昔共に連続して一大湖をなせしが此回を始め數回の噴火に伴ふ熔岩流の爲め區分せられしものなりと現今の地質に徴しても其然るを見る



- (八) 承平七年(937)十一月甲斐國言富士神火水海を埋む
- (九) 長安五年(1132)十二月富士山焚く峰より山脚に至る
- (一〇) 永保三年(1183)三月富士焚く
- (一一) 元弘元年(1331)七月七日富士山鳴動山崩るゝこと數百丈此頃よりして中央の噴火口より日常の噴煙は止みしものゝ如し
- (一二) 寛永四年(1628)富士山焚け江戸灰降る
- (一三) 元祿十三年(1700)富士山火起る
- (一四) 寶永四年(1707)十一月富士山腹破裂燒石土砂を噴出し雲中火昇ること數十丈震動の聲遠國に聞ゆ相武二州悉く石砂降り十二月七日火消ゆ此時有名なる寶永山を生ぜり是れ近世のことに屬するを以て其噴裂の狀は今尙口碑に傳ふる所なり
- (一五) 安政元年(1854)十一月四日富士山鳴動して箱根の方に向ひ崩壞

以上の如く、富士山噴裂に關する記事は孝安天皇の朝富士山涌出すと云ふより今日に至るまで大凡十五回あり、願ふに上古は此等の記事欠如せしこと多く、恐くは尙之れに數倍する大噴火ありしなるべし、又近古までは常に中央の噴火孔より噴煙したることは古文古詩歌等によりて明なり、然るに一般地火力を漸次衰ふると共に此山も日常の噴煙は既に止みしのみか、安政以來不時の異變も又之を聞かず、中央噴火孔は今全く消滅して丈山翁が所謂白扇の純素に似たる雪は尙存ずるも柄の如き煙は既に見るべからざるに至れり、但し成就岳の北邊に噴煙の名残を留むべき氣狀噴洞と稱するものありて、幽かに白煙を擧ぐるのみ、されど其昔噴裂の感ありし遺跡は數多存する内、火山災害中最も恐るべき溶岩流は、延暦年間吉田口を走りて猿橋驛に達せし、長流の外



尙二流あり、一は噴火口より西に流出し大澤の石瀧をなし、精進川に降り富士川まで達せしもの、一は東南に流れて萩原、駒門、新田等を覆ひ南に流れ佐野(停車場)を経て東海道三島驛に達するもの、是なり、斯の如く富士は其噴起以來幾度か熔岩を流がし岩塊を堆積し従つて凝固すれば従つて噴出し遂に堆積して現今の如き高峻雄壯の圓錐狀をなせる所謂成層火山と稱するものなり、然るに此の雄壯なる倒懸白扇形を破壊するものは寄生火山の噴起にてあるなり、凡そ火山は概ね圓錐狀を成すべきに多くの火山は中央の孔の外中腹を破られて其形を損せるもの比々皆是なり、富士も寶永山によりて頗る其形を損せざるにあらずれども幸に甚しきに至らず、此外西北に突起する小御嶽、東方に隆起する小富士等あれ共本山の大に比すれば微瘡たるに過ぎずして、美なる倒扇形を損するに至らざりし

は幸なりと謂ふべし、抑々我國第一の名山たる富嶽が版圖の中心たる東海の表に坐位を占むるは我日本の地體構造上決して偶然にあらざるなり、富士の位置たる樺太山系の構造する北日本と崑崙山系の構造する南日本との相對峙する一大觸接點にして富士の火山帯は則之れが縫裂線となりて、南北兩日本を接続せしめたり、然らずんば今の本州は南北兩島たりしならん、若し此の如くならんか其人事に關する所決して小少ならざるべし、史學家クリン氏は其英國史に於て歎して曰く、英蘭と愛蘭とを隔絶するセントジョージ海峡の陥没をして後年に起らしめなば愛蘭の征服は夙に其全効を奏し、チネートン血統の浸染を深からしめ、現今の如く愛蘭問題に區々たるの憂なかりしなるべし』と、我帝國の富士帶をして試に今も尙一大海峡を存せしめ南北兩日本をして全然分離せるも



のとせば如何果してクリトンと其歎を同ふする歴史家なかるべきか、必ずや我帝國歴史は今日許多の異蹟を留めしならん、然るに大嶽の一帯爰に噴起し本土を打て一島となし、亦之に拮抗すべきの餘地なからしめ我帝國は實に圓滿なる建設を見しのみならず、其雄壯脱俗の姿を以て國の中央に卓立し、古往今來國民思想の集注點となり、其玲瓏たる秀色を以て國民の純潔なる美想を養ひ、其豪宕不羈の姿は以て我國民の氣象を鍛鍊したり、嗚呼富士山は自然に於て既に彼の如く而して人事に於けるも又斯の如し實に富士山は我帝國の代表たるなり、亦以て我國民の代表とせざるべからざるなり、

富士山

文學博士

外山正一

皇御國の 武士の 心を映す 山と知れ。 高根に積る 白雪は、清

き心の 鑑なり。 天に聳ゆる 山の峰。 仰げは心も 彌高し。 仰げや 仰げ 富士山は。 大和心の 守なり。

二

朝夕に 眺むれど。 絶へて厭かぬは 富士の山。 朝日に照す 其高根。 視れば忘るゝ 世の汚。 月影清き 雪の峰。 心のくまも 晴るゝなり。 仰げや仰げ 富士山は。 大和心の 守なり。

三

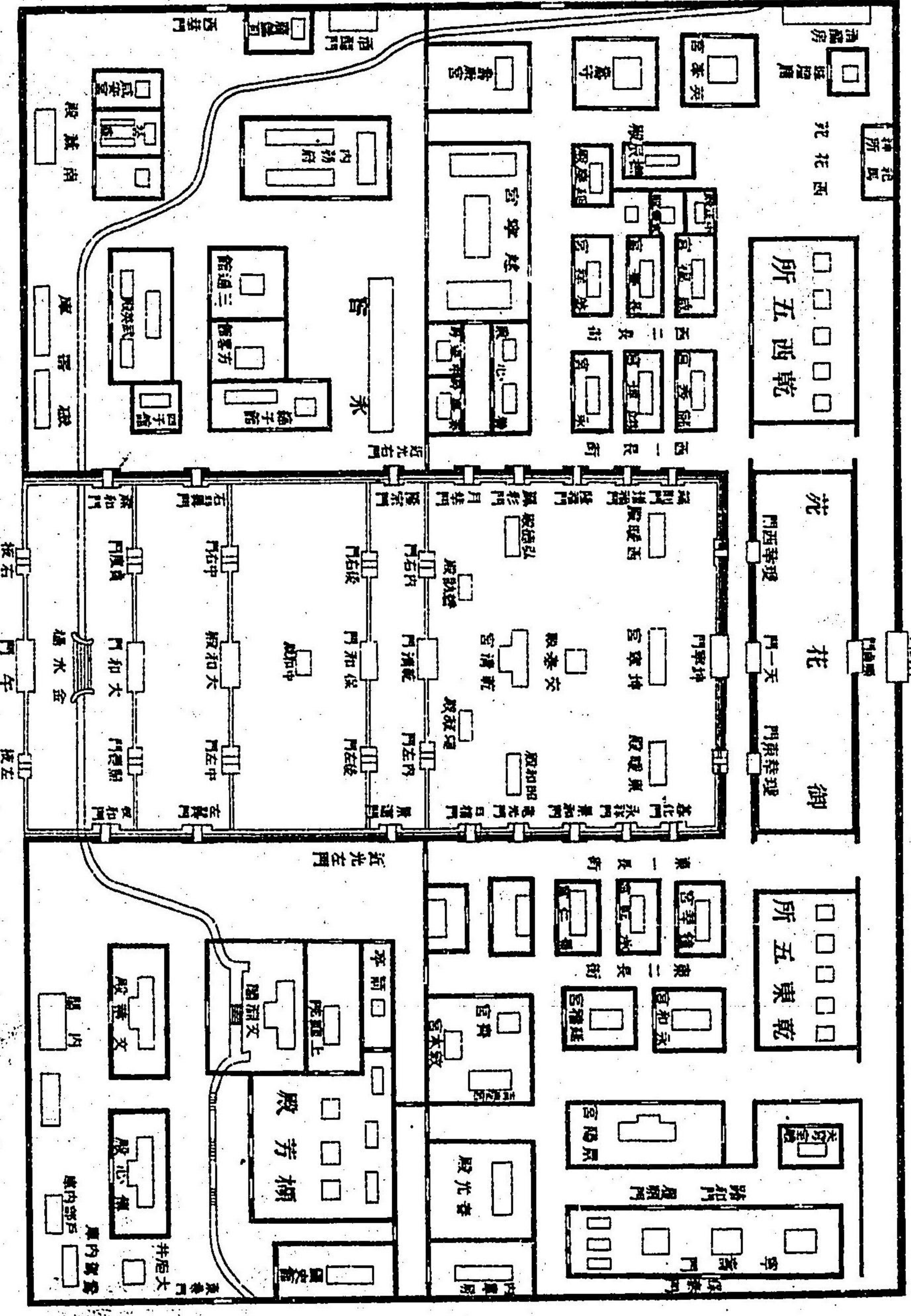
異國の旅の 夢にさへ。 父母と慕ひき 富士の山。 海原渡り 歸朝身の。 始めて見るや 富士の峰。 喜び躍り 手な打ちて。 アレアレ 富士と 叫ぶなり。 仰げや仰げ 富士山は。 大和心の 守なり。



### 北京の紫禁城

余は北京皇城の秘密宮を仔細に視察せんが爲め兩回まで紫禁城の拜觀を遂げたり一は明治三十四年八月の第四月曜日、次は九月の第二金曜日、凡そ拜觀者は午門。即ち南大門より入るを例とす此門を守備する米國兵に拜觀券を示して入るなり此午門は皇城の正門にして其壯大なるに比類なし廣さ各九間ある門闕三つあり其左右に又各一掖門あるを以て都合五門闕あり故に或は五鳳樓と云ふ中央の門闕は天子の駕の出入する所にして左闕は文武百官右闕は王公宗室の出入する所なり門上には重樓を置き鐘鼓を備ふ駕出する時は鐘を鳴し、太廟を祭らるゝ時は鼓を撃ち、又百官參朝の時は鐘鼓共に鳴らすと云ふ門を入りて大理石を敷ける道を進めば内金水橋と稱する總て大理石を以

紫禁城全圖





て造れる五個の大橋相駢びて架せり其橋板大理石にある龍及波の彫刻の如きは實に精巧を極めたり橋を渡りて太和門あり門を出づれば廣庭に出づ前面遙に太和殿あり百官の拜賀を受け或は百官に位階を授けらる時は此殿に御せらるゝと云ふ前面の廣庭には大理石道を中心とし左右には品級山なるものあり即ち正一品從三品等と彫せる銅製の標を建てたり是れ位階に應じて百官の拜賀すべき座班なりと右を文官とし左を武官の班とす試に正一品の班より太和殿を望むに玉座までは凡そ二百間もあるべきか薄暗き殿中人影の有無さへも定かならざ太和殿は陛を昇ること十一丈の高さにありて廣さ十一間縦五間あり檐重りて屋蓋四方に垂れたり其建築寺院に異ならず前後には金扉四十金鎖窓十六なり中央に御座あり陛の間には鼎十八銅龜三銅鶴二日圭嘉量等の寶器を置けり殿の正面に乾隆御筆と署せる建極綏



猷の大額を掲ぐ、風露殿中を荒らして勅額既に破れ殿中の絨氈塵埃積むこと三寸、廣庭の品級山は人肩を没する雜草に埋まり荒野の古墳を見るの感あり、昨夏の變に逃げ後れたる宦官等今尙宮中に在るもの四百名拜觀者を見れば憔悴として尾し來り憐を乞ふ狀、亡家の狗に異ならず憐れとも亦哀れなる哉其の動作婦女に異ならず容貌亦變生女子の如し是等の宦官は幼少の時罽丸を抜きて入内せる者なりと云ふ  
太和殿を出れば中和殿あり正面に乾隆御筆の「允執厥中」の額を掲ぐ此殿は祭日に祝詞を視玉ひ、耕籍に五穀農具を視玉ふ所と云ふ、中和殿の後に保和殿あり正面には例の乾隆御筆の「皇建有極」の額あり此殿は毎歲餘夜に外藩の使節を饗せらるゝ所と云ふ、後に乾清門あり乾清門を  
入れば乾清宮あり順治御筆と署し「正大光明」の額を掲ぐ此宮は親王に宴を給ひ大官を引見せらるゝ所と云ふ、又康熙帝の時千叟宴とて破格

を以て國內の六十歳以上の老人を饗せられし有名の宴も此宮に開かれたりと云ふ、盛徳仁政餘香今見るべきなし只目を惹きしは精密なる大天球儀と凡千を以て數ふべき蒙古語の高宗實傳と長三尺幅一尺八寸の瑪瑙ありしことなり又宮前には金盤の口徑六尺高四尺なるもの一對及び金獅子の高さ六尺あるもの一對あり曾て無垢金とて有名なる物なりしが今見るに其實は減金なりき  
乾清宮の後に交泰宮あり此宮は最も大切なる宮にして、日○本○人○に○あ○ら○ざ○れ○は○入○る○を○許○さ○ず○と○入○れ○ば○金○銀○珠○玉○目○を○奪○ふ○迄○に○鏤○め○是○迄○拜○觀○せ○る○各○宮○殿○の○内○に○あ○り○て○は○最○も○美○麗○な○り○或○人○は○日○光○の○東○照○廟○と○如○何○と○云○へ○り○宮○中○に○は○御○用○寶○璽○二○十○五○を○奉○藏○す○即○ち○天○子○の○御○印○璽○な○り○皆○高○さ○各○々○五○尺○許○り○な○る○見○事○の○臺○に○載○せ○帛○を○以○て○之○を○覆○ふ○二○十○五○璽○の○一○例○は○大○清○受○命○之○寶○以○章○皇○序○と○刻○す○臺○玉○に○し○て○方○四○寸○四○分○厚○八○分○交○龍



の紐高さ一寸七分あり御座には洋風時計の高さ一丈なるあり左には所謂水漏あり其製造頗る奇なりし... 交泰宮を出づれば坤寧宮あり是れ慈禧皇太后(西太后)の便殿なりしと云ふ正面には西太后御筆の額幾個か懸け連ぬ右方は御居室にして廣やかなる椅子の左右には許多の珍奇なる重寶を列ねたるが中にも珊瑚琥珀玉ルビー翡翠等の寶石を以て造られたる菊柘榴等の盆栽獨逸製の花瓶象牙等は別けて結構なりし只製作は頗る幼稚にして美術園に生れたる余等の目には美麗なれども生氣なき心地せられたり正殿の左右は御寢殿にして支那風の床に白絹の厚き褥を布き長三尺にも餘る枕あり壁間に極々の惡畫一幅掛けり怪しみて諦視すれば奴才連英敬畫と署せり是れ太后の嬖臣との噂高く當時西安朝廷に於て怪力を奮ひつゝありとの説ある李連英の畫なり坤寧宮の左右に東暖殿

及西暖殿あり冬時寒を凌がるゝ殿なるべし坤寧門を出づれば一壁の長く亘るあり門あり順貞門と云ふ門を入れれば御花園なり種々の花卉樹木を植ゑ奇石怪巖諸々に隣れり藤の柵塗るに朱漆を以てす頗る結構を極めたれども雜草深く茂りて陰濕特に甚し例の宦官等頻りに尾して茶を勧め喫烟を勧む五月蠅きと限なし御花園の瓊園門を出て西一長街を南に進み右に折れば養心殿あり是れぞ悼ましき光緒皇帝及皇后宮の便殿と聞へし謹んで殿内に入れば正面には乾隆御筆の人君たる鑑を記し玉へる大字の大幅壁間に掛けられたり其前に御座を置き左右に青玉の香爐孔雀の長羽團扇を立つ總て是れ唐畫に於て見る宮殿其儘なり其右は皇帝の便殿にして一方に御寢床あり青絹の褥あり周邊には金銀製の置時計幾十個洋風の安樂椅子寢椅子錦繡の頗る美麗精巧なる掛物又使臣が外國に使せる



土産にし献せしにやあらん歐洲の花瓶大小數個となく列れり中に日本九谷焼の花瓶一對をも見受けたり是より暗黒にして足元見へざる廊下を過ぎれば狹隘なる幽暗の一室あり是れ皇帝の御書齋なりと云ふ乾隆御筆にて三希堂と書されたり又壁間には皇帝御筆の畫二三個掛けられたり是を罷りて正殿に返り左手の一殿は皇后宮の便殿なりと流石に御女性丈けに拜觀する物盡く優婉華麗の御品にて其製作は幼穉なるを免れず御寢床は緋絹に金紋ある薄絹にて作られ長さ三尺餘の御枕二個を并べたり傍に二個の便器を供ふ御座の近りには玩弄様の器具幾個か列へられたり余は前に書するのを忘れたる一事あり即ち皇帝便殿に大天球儀と上海益智書會發行の見事なる世界全圖の大幅ありしとと皇后便殿にビヤノ二臺を供へありしとなり養心殿の拜觀を了りて天子の御經筵なる有名の文華殿傳心殿等數個の大宮殿

を見たれども之を略す又西方に當りて幾十個の宮殿を見得しが是れは女官の住む所にして今尙百餘の女官あれば拜觀を許さすと云ふ遂に北門なる神武門に至れば我兵の嚴然として守備するあり此門を出て、拜觀を了れり  
 莊殿は則莊嚴宏大は則宏大なれども其建築幾多の寺院を集めたるが如し屋根には飴色瓦を被ひ内飾は祭日の山鉦の如し總て一時的のものにして永久を期せしものにあらず其最盛時は乾隆帝の時なりなるべく其後絶へて修繕を加へず風の荒らすまゝ雨露の漏るまゝ雜草の茂るまゝに任せたるを以て一見其荒廢に驚かざるを得ず試に此變亂以來の荒廢なるやを問へば幾十年來斯の如しと云ふ瓦石間の灌木決して一年生の物にあらず殿内の鳩糞積んで寸餘是れ又昨夏來のものならず嗟乎是れ果して何等の兆ぞや拜觀了りて撫然たり、



海國無盡藏の富源

若し島と水とが先天的に相離るべからざる者とせば、日本と海との關係も亦先天的に親密ならざるを得ず、而して其關係に就て種々の要件あるべしと雖ども、海を相手とし、海を利用することは、海國人の第一に念頭に置かざるべからざる事たり、就中海水中に産する有用物を撈舉して之を人生活達の目的に供用するは、海國の最大要義とす。

海水の生産力は頗る偉大なるものにして、若し「海利を收むるの方法其宜きに適へば、陸地の生産額よりも遙に大なり」とは、泰西水産家の頻りに唱道する所なり。

魚類、海藻、貝殻、製鹽等其利總て甚大に、獨逸人ヘンゼン氏は海産額に就き一種の調査を遂げて曰く「海洋中にては最も海産の聞へある獨逸

の東海に於ては、殆ど海産地の同一面積の地産力に拮抗すべしとせり、況んや生産豊富の海洋に於ては尙ほ之に數倍するの漁獲あるべく、尙ほ況んや海藻貝殻製鹽の副産物夥しき處に於てを、海利の洪大なる知り難からず。

我邦は言ふ迄もなく四面環海の島國にして、海産の豊富なるべきは地形の既に明示する所なり、全國を圍む海岸線の延長は實に七千四百五十六里に亘り、國土の面積三方里六に付一里の海岸線を有する割合なり、斯の如く海岸線に富める邦國は全世界に於て殆ど其比を見ず、故に我國土は到る處濱海地と謂ふべく、其海岸は皆好漁場ならざるなし、加ふるに我近海には南より温暖の潮流來り、北より寒流來りて、殆ど版圖の周圍を流通するを以て、諸種の鱗族は諸方より洋流に伴ふて群遊し來り大抵産せざるものなし、今我國の領海に屬する面積を總計すれば



無慮七百三十萬町歩あり之を現今耕作に供する全國の田畑五百七萬町歩に比すれば海面の生産場の耕地より廣きこと殆ど五割なり是れ只其領海を謂ふものにして尙ほ遠洋の漁場は西にも東にも北又南實に涯限あることなく採りて禁する者なく收めて盡くるとなし是れ實に海國無盡藏の富源と謂ふべし是を以て海國は設令領地の面積は廣からすと雖も内地に介立する無海國若しくは海岸線短少なる陸國に比すれば其富財の要素に於ては決して年を同ふして語ふべからず海國の海利を收取すべきこと斯の如し然るに我邦は四面環海の位置にありながら而かも領地の面積は狭くして山多く生産の餘地に乏しく人口最も夥しきに拘らば住民の活を覓る富源は無盡藏の海にあらざりて描額大なる陸にあり其日常の食品も十の八九は之を土地より生ずる植物性に仰げり魚類を食膳に上せば佳味とし賓客を饗應する

に魚鱗を調料すれば之を以て優待とす奈ぞ其れ事情の相反するや本邦の如き海島國にありては海産物を以て常食とし地産物を以て却て珍味とすることを寧ろ當然なれ而して其然らざるものは全く古來大陸國なる支那の流に倣ひ農は國の本として専ら地産に重きを置き四面に海あることを忘れたるの結果にして海を利用するの法拙劣にして海業の幼稚なるに歸すべし抑々我國の海産に富めることは世界中の各洋海に於ても其類ひ稀なる所なり中にも北海道附近は歐洲の西北海及北亞米利加の東北洋と共に世界の三豐漁場と稱せられ鯨臘虎臘獸の貴重海産を始めとし彼の鯨鱈の如き非常に豊富にして人の來りて漁獵を待つものに似たり左れば心ある他邦人すら之を無益に棄て置くに忍びず態々遠洋の波濤を渡り來りて天與の恵に浴せんとし或は釣漁と罵られ或は密獵



と呼はるゝに拘らず、年々來りて莫大の漁獲をなして、鉅萬の富を得つゝあることは、我國民の齊しく知りて齊しく憤慨する所なれども、又齊しく放棄する處なり。是れ種々の原因ありて然るべしと雖も、主因は彼の大陸國なる支那に倣ひて眼を地産にのみ着けたる結果ならん。然るに今や幸此貪眠を破る曉鐘とも稱すべきは先回勅令を以て發布されたる遠洋漁業獎勵法なり。該法によれば支那、臺灣、海峽、黃海、朝鮮、海峽、日本海、オホツク海、太平洋の各洋海に於て鯨、鰵、虎、鰩、豚、獸の獵業及び鱈、鮭、鱒、鱒、鰯、柔魚、大鰯の漁業に従事する者は遠洋漁業獎勵金を受くべきの制なり。是れ従事遠洋の漁業に不慣れにして僅に一葉の小舟を浮べて細鱗を漁りたる漁業者を驅りて遠洋大漁業に慣れしむべき習練法なれば、各々奮て此の特別の獎勵中に遠洋漁業の手續を鍛ひ、併せて眞に海島國民たるの性格を養はざるべからず。此の法は

試に從來我國海産の景況を述べんに、維新の後は一一般の進歩と共に海利の洪大なるを認め、政府にも水産局を置き、民業を獎勵誘掖し、又民間にも大日本水産會等の設立ありて同志を結合し、或は水産傳習所を設けて漁業及水産採取の法を教習する等の美舉ありしを以て、漁業は頗る進歩し、産額も亦年々増加し、最近の海産價額は約壹億圓に達せりと雖も、是れ果して海島國の國産と稱すべきや、之を我夥しき人口に配當すれば實に僅少にして一人額貳圓拾三錢に過ぎず。海産物の高價ならざらんとするも豈に得へけんや、一年僅に貳圓餘の海産額、之より食鹽、鯨節を引き去れば既に殘る所幾何ぞ、平民的食膳には數ノ子田、作鱈位を珍味とするに過ぎざるなり。海國にありながら魚骨を以て藥品とし、生魚を食せりとして人に誇るの奇談あるも無理ならぬ事と謂つべし。之を食用農産物の一年平均産額大凡十二億圓、一人分額二十八圓五十



錢に比すれば甚しき差違と謂ふべし、又漁戸及漁業者の數より見るも、本邦漁業の甚だ幼稚なるを知るべし、全國の專業漁戸及兼業漁戸を合すれば凡そ三十八萬戸あり、内兼業漁戸二十二萬戸あれば、之を切半して專業漁戸と見做せば十一萬戸なり、即ち專業戸二十七萬戸あり、其人口凡百二十萬人、即ち總人口の三十五分の一なり、之を我邦の海岸線の割合に比較すれば、海岸線一里に付三十六漁戸にして、人口百六十一人を有する比例なり、次に少しく我邦海産の配布に就て述べんに、元來海産物程嚴格ある地理的配布の限界を有する物なし、即ち濱海地の魚藻限りなく産するに引き換へ内地に絶無なり、次に潮流は海産の分布に於て最も親密の關係あり、例へば或種の鱗介は溫暖なる潮流を好み、此流を逐ふて游泳すと一方には、寒流を好みて繁殖する水族あること、恰も陸生動物の寒地

と暖地とによりて分布に差あるに異ならず、水界學者モリレー氏は棲息する魚介の種類によりて其海洋の水温及洋流の如何を卜すべしと言へり、彼の鯨の寒流に接み暖流に逢へば之を海灣に避けて、爲めに土佐灣の如き處捕鯨に適するが如く、又鯔の水温の變化に逢ふて九十九里沿海に群集するが如き、又鯉の暖水に随つて九州西南沿海なる肥前薩摩及四國の南岸、土佐沿海に多漁なるが如き、或は鯉の北海道の沿に限りて産し、鱒の日本海岸に限り産するが如きも、皆水温の如何によれるものなり、又寒流に産する魚類と暖流に産する物とは其滋味に差あり、寒流産は暖流産に比すれば遙かに美味なり、暖水には石花叢生し、珊瑚紅をなし、魚介も亦鮮麗なること、恰も熱帶地方の鳥獸草木昆虫の華麗なるが如し、然れども其味に至りては肉軟弱にして淡泊なるを常とし、到底寒海産の魚類に及ばず。



本邦海産の配布も亦北方に豊富にして南方に至るに随ひ減少す是れ潮流氷温の高低によるものなり北海道沿岸は我國第一の多産場にして則ち世界三好漁場の一なり各種の水族多きが上に臘虎膾炙獸の如き貴重産あり故に北海道最近の水産額は一千三百萬圓に達し全國總産額の一割三分を占めたり之を海岸線に配當すれば一里に付一萬五千五百圓の産出にして人口に配當すれば分頭二十一圓なり持に千島寒流來滿寒流樺太寒流中には夥しき水族を産す北海道より南方に來れば次第に産額を減じ本州に於ても東北地方沿岸は多産なれとも上總沖南方に至れば大に産額を減せり本州の總産額は一千五百六十八萬圓なれとも之を海岸線に配當すれば一里に付六千三百三十五圓にして北海道の半額となり人口に配當すれば北海道の四分の一にして僅に五拾錢となる四國に至れば尙産額減じ總産額百七十五萬圓

して海岸線一里に付二千六百二十五圓にして一人口に付六十錢なり九州は更に減じて其總産額は三百五十六萬圓なれども海岸線に配當すれば一里に付一千九百十八圓にして一人口に配當すれば六十錢なり更に沖繩に至れば其産額は大に減じ其産額は只三四萬にして海岸線一里に付二百圓一人口に付僅に十錢に止らず實は沖繩を海島地なれば海産豊なる感あるべけれども自然の配布は又争そべからざる事由にして之を窮北なる北海道に比すれば海岸線に對する産額は六十七分の一にして人口に對して僅に二百分の一なり海産物の配布は斯の如く南部に薄くして北部に厚きものは偶々以て造化の公平にして偏頗ならざるを見るべし總て地産物にありては南方の温暖地に厚くして北方の寒地に乏きを常とす禽獸草木昆虫に至るまで南地に種類多くして其繁殖も亦速かなれば南方暖地は凡て農



産物を以て生活の大基本とし、之を以て興り、又之を以て進めり、然るに寒地は地産物薄きを以て、水産の配布豊富にして、其平衡を保持するの微意なれば、特に北地人は茲に留意し、必ず海産に重きを置き、之を以て興り、又之を以て進むの覺悟なかるべからず、然るに農産にのみ戀着せる舊習は、較々もすれば地寒にして農産豊ならざれば、直に以て劣等に置き、亦深く顧みるに足らずとなすか如しと雖も、是れ思はざるの甚しきものにして、亦海國人たることを忘れたる者なり。

再び言はん我國は海島國にして二萬七千方里の外、又何れにか陸土を究めんや、四千七百萬の同胞、茲に群居し一方里の山野は一千七百三十七人を以て共有せられ、一町歩の田畑は八人を衣食せしめざるべからず、地産力には限りあり、人口の増殖には限りなし、一町の田畑は以て十口を糊するに足らず、我邦今日の國本は農にあらす、商にあり、工にある

べしと雖も、海産は我國の形勢に鑑みて、慥かに國本の一に數へざるべからず、回顧すれば西隣には數百萬方哩に亘りて海を有せざる支那大陸國あり、其人口は我に十倍し、而も盛に我海産を需用す、之を華主とするも、優に國を立つるに足るべし、加ふるに東隣にも數百萬方哩に亘る北米大陸あり、又我海産物の需用地なり、而して我四維を圍む廣大なる無主無領の海洋中には、水族波に躍りて人の捕獲を待てり、我國の海産は實に多望と謂ふべきなり。





北國の深雪

『北國は寒地なり』との豫想は早く世俗の腦裏を填充し北國と謂へば先づ朔風吹雪の觀念を起すを常とすべし故に若し『北越は何故に深雪なりや』との疑問には概すく『寒地なるが故なり』と答ふるものあるべし然れども是れ固より其正當を得たるものにあらざるなり世人が北國を以て寒なりと想像するは實に北國の宛にして北國は決して世人が想像するが如き寒地にはあらざるなり余北客中聊か實驗あれば之を述べん

請ふ先づ氣温より之れを説かん凡そ日本の全年平均温度(臺灣を除く)は十二度にして深雪地と稱する本土西地海岸は實に十三度乃至十度六の間にあり即ち福井に於ける十三度四金澤に於ける十三度一輪島に於

ける十二度六伏木に於ける十三度一新潟に於ける十二度六秋田に於ける十度三にして秋田を除くの外は皆全國平均温度よりも高温を示せり又夏期に於ける北西岸の温度は同緯度の地に比しては一層高く八月中全國平均温度は二十五度なるも此地は二十六度乃至二十七度にありて東京の二十五度七に比して福井は零度八新潟は零度七伏木は零度五高しとす即ち九州四國の温度と殆ど差違を見ず冬期と雖ども亦甚しく低温なる處にあらず一月中の平均温度零度なるは秋田のみにして輪島の如きは東京に比して却て零度二の高温なり

氣温は斯くの如く甚だ低温なる處にあらず寧ろ中土の暖地に屬すべき所なり然るに北地の深雪なることは實に世に隠れなき事實にして是れ即ち世人をして北地即ち寒地なりとの誤認を抱かしむる所以にして北國が世に高名なる處も蓋し亦此邊にあり三越加能兩羽地方は



毎年冬期に及べば積雪實に甚しく、海岸の平地にても三四尺を常とし山間溪谷の地に至れば例年一丈乃至二丈の積雪を見るべし、彼の柴田修理か水墾を破るの勇あるも積雪を除くの術に盡き雪を叱したりとは史に傳ふる處にして越後高田の邊は積雪村市を埋め此下に高田ありとの標識を要するの奇談さへあるに至れり

又加賀の越前に境する所手取川の水源に牛首(今白峰村)なる山村あり地最も深雪の僻邑にして毎年冬期に及べば積雪山野を埋没し家屋は皆雪底數尋の下に埋められ職業を營む能はず故に薄産の小民は此期に及べば屋上に竹竿を建て以て標となし家屋を鎖し全家相率ゝ近傍の市邑に出て、食を乞ひ融雪の期に及ひて始めて飯村するを常とす、金澤福井邊にて之を『牛首乞食兒』と謂ひ憐を興るとせり、又村中少しく資産あるものは家屋を三層或は四層とし降雪の積るに従ひ二層三層と

進て轉住し遂に人は五層に籠城し四層樓上を厩となし馬を吳山の第一峰にあらずして家屋の第四層に飼ふの奇談あらしむるに至る亦た以て其の深雪地たるを知るべし

北國が以上の如く深雪なるは抑々何等に基因するや既に論するが如く温度は他に比して低温なるにあらずされば他に必ず此の原因となるものなからざるべからず又假令温度は他に比して低しとするも只低温なるが故に深雪なりとの理由は成り立たざると論を俟たざる所なり、然れば今其原因となるものを究むるに皆悉く之を其地の形勢風位に歸せざるを得ず、蓋し本邦北西海岸の地勢たる其東南方には本邦の脊骨とも稱すべき蜿蜒長蛇の如き山脈ありて其後背を擁し、全く東南部と隔離せり、而して其北西面する處は、即ち日本海にして遙かの彼岸は亞細亞大陸なるべし



抑々我國冬期の主風たるや北西の定位にして、此風は極目蕭條寒烈なる西伯利の太平洋を吹き荒したる餘波にして直に北西の方向を取り日本海を渡るに際し、其海面より發散する水蒸氣を率ゐ、之を誘致するに當り其低温なるが爲め行々其の水分を凝集して雨滴となし、或は凝結せしめて雪霰となし、其の衝き向ふ所は即ち此の北西岸なるべし、而して尙ほも進行せんとするも、後背に聳ゆる屏風の如き連山は爰に擁護して其前進を許さず、其の運搬する蒸氣は悉く山脈以内に降らせしむべし、故に冬期此邊に雨雪量甚た夥しきと後段の如し、凡そ本邦の暑候は濕期に屬し、寒候は乾期に屬すと雖も、獨り北西岸は全く此の乾濕に及じ、晚秋季候より北西風に更代する頃より漸く雨量を増し、十一月より十二月、一月、二月及び三月の中旬頃までは日本國中此の北西岸雨量多き所ならず、就中十二月及び一月を以て最も甚

しとす、即ち此の二ヶ月中の平年雨雪量金澤に於ける六百〇三耗伏木は四百四十一耗、新潟は三百五十八耗、秋田に於ても尙ほ三百三十六耗あり、此等と略ぼ緯度を同ふして只々腹背を異にする、東南岸なる沼津の平年同時の雨雪量百〇一耗及び東京の百十耗、野蒜の五十五耗、宮古の八十五耗等に比する時は十倍乃至三倍の大差あるを見るべし、而して此の雨は前に述べし烈寒の北西風に送られて既に氷點以下に達したる六花なるを以て此期節に於ける北西岸の深雪なる亦決して怪むに足らざるべし、晴れの半面雪の半面を参照すべし、故に北西岸冬期の氣温は上際と下層とに於て著しき差違あり、下界の氣温は未だ氷點に達せざるに、上層の北西風は寒威殊に強く、秋風十月下界の黃菊は尙ほ東籬に媚ひて餘愛を乞ふも、六花は早く既に繽紛として其更迭を促して止まざるあり、又青帝己に駕を回して魁花地に委



し、桃李唇を現はすに當り、時に或は霰彈の其不意を襲ふとありて降雪の期甚だ長く、金澤福井新潟秋田は例年十月下旬の初雪にして終雪は四月上旬にあり、故に凡そ百五十日間には降雪の覺悟なかるべからず、以上は皆な此地深雪の理由なりとす。

深雪

我もまぢ人をもとはん道そなき

雪のあしたのをの、山里



婦 人 と 地 理

日本人の宿弊は島國根性にあり、智見の狭きにあり、眼界の卑近なるにあり、而して此の弊は子女養育の大責任ある婦女子に於て特に然りと謂はざるを得ず。此の島國根性、此の智見の狹隘、此の眼界の卑見は如何に我が國の不利益を貽しつゝあるかは、予が事々しく説明する迄もなく、我が國民は稍々其の缺點を知れるなるべし。予は此事實を證するに、は唯々僅か二萬七千方里なる掌大の地に四千七百餘萬てふ世界稀有の大人口を有する一證を擧ぐれば既に足れりと信ず。島國根性なるものは、我が國が少なる島國たることを明にすれば、已に幾分か此の根性を救ふに足るべし。智見の狭きは海外萬里の事情を知れば、其の狹見を拓くに足るべし。眼界の卑近なるは一幅の世界地圖を



觀れば眼界を遠大にするを得べし。我が小島國たるを明にし、海外萬里の事情を知り、世界地圖を觀察するは是れ悉く地理學の範圍たるに外ならず。

ホ大バ、ト、オボレ、オが歐洲統一の鴻志を抱けるは、其書生時代に獨り樹下に靜座して世界地圖を展くを以て、無上の娛樂となせるに基くと謂ふべし。否此の地圖展觀の趣味は慈母搖籃中よりの教訓にありとす。ピスマ、ロ、カ獨逸帝國中興の偉傑たるの資は、小少にして旅行の奇癖ありしに基す。此奇癖は實に地理教訓の結果ならずんばあらず。

シ、プ、スが新世界發見の偉蹟を奏せる。セルランが世界週航の雄志を抱ける。卓上に養はれたる地理觀念を實地に試用したるに外ならず。

豊太閤征韓の雄略は支那の事情を聞き、朝鮮の地理を明かにしたればなり。頼山陽の博識一世を歴し、發して雄篇となり、長詩となれるは、彼か

日本全國を踏破し、あらゆる山河を跋躡せる効果、其の過半に居らん、而して此れ等の英傑は其の幼時を問へば必ず斯く成るべき多少の素因なくんばあらず。素因とは何ぞや、即ち幼時の地理的少くも其の意義、教訓、桃太郎の鬼ヶ島(地理)征伐の如き是れなり。

地理學の範圍は廣し、兒童等日常の質問は其の過半は實に地理學的範圍を出てざること多し。其の質問に會ふ毎に其の兒童智識の度に應じて、淳々として適當の説明を與へて兒童に満足を得せしむるは之れ婦女子の任たり。然るに昔日のお婆さんも今の婦人も相變らず、太陽は白日様にて中に翔ける鳥あり、太陰は月様にて餅を搗く兎宿れりの説明にては徒らに兒童の妄想を誘致して先入主となり、遂に後年の憂を貽すに過ぎず。又兒童が日々途中にて蹴揚ぐる頑石の出所、雨中眼前に横流する潦水の行く先き等は常に幼き口より出づる高尚なる質問あり。



り此等の質問に對して少しく地文學素養の智識ありて其の兒童が了解すべき度に應じて平易にして趣味ある談話を試みれば後年學校の地文教室に於ける其教師が百の講義にも勝ることあらん

日常家庭の談話に於ても荒唐無稽なる若くは殘酷非道なる有害無益の世事人情談に代へて慈母の口よりして世界週遊畫報等によりて佛國ニッフェル高塔の雲漢を摩する奇觀の話亞非利加内地の珍話印度の虎狩りの話亞米利加の廣大なる富濠洲の奇妙なる獸類美麗なる鳥類等の面白き說話出で助くるに兼て兒童の心氣を開弘すべき說話を以てせば其の世界に對する思想の基をなすと善し幾何ぞや

尙ほ婦女子の注意すべきは必ずしも歐羅巴と云はず必ずしも亞非利加と云はず將た米國濠洲と云はず兒童の常に目撃し常に遊嬉する其の周邊に羅列する地理事物に就きて地理的説明を與ふること是なり

其の居住する市町又は村落の成立歴史位置人口或は其の後に峙つ山其の成立其の高さ或は其の前を流るゝ河其の源其の流域其の長さ其の幅其の放注所若くは町村の周邊を圍む森林平野等總て郷土の地理的事情を悉知し何時にても兒童の質問に應じて猶豫なく誤謬なく説明を與へ得る丈けの豫備をなし置かざるべからず決して之を學校の地理教授に待つ心の心得を有すべからず而して此の郷土的地理觀念は後日其の小府縣管内より進んで日本全國尙ほ世界各國の地理を學ぶ基礎智識となすべきものなれば最も注意せざるべからず我が村町の人口は他日他の人口を量るの升に用る郷里の山の高さ河の長さは他の山河を計る尺度とし其地勢其風土も亦悉く之を比較標準に使用せざるべからざる重要な材料たればなり

語を寄す我帝國將來の國民養成の大任ある世間幾多の巾幗諸媛よ將



來の帝國を組成する我が國民には今少しく快瀾に今少しく大膽に今少しく遠大の氣風を供へしめよ我が國は今や時勢に驅られて日本の本となれり國民の氣風豈に獨り古風に卑屈に島國性なるを許さんや今や時期既に盛夏に際し學生は笈を負ふて懐かしき古棲に歸り會て夢寢に往來せし古郷の山古郷の水に接することを得へし地理研鑽の機會此の時より好きはなし又學生にあらざる秀園令嬢とても或は良人と共に或は父母と共に暑を山間海邊に避くるの時期となりぬ實に地理實地の觀察は此の時にあり卓上の書籍によりて得たる智識は之を實地に見て其の智見を確實ならしむべし常に都會に生活して高山大海を知らざる者は其の雄偉の景を見て天然力の盛なるに感ずべし兎に角今三四句は實地經驗の好機なり此の好機決して空費すべからず今日我が國情の婦人に許す範圍に於て成るべく旅行し成るべく多くの事物に觸接して其の智見を開拓するとに勉むべし今日の我が國は米國女學生の如く學友相携へて湖畔天幕露宿の避暑旅行を許せず又歐洲婦人の如く山間天幕旅行の大膽なしと雖も其の資格に應じ其の身分に應ずべきは勿論なれども成るべく姫樣的旅行を避けて研學旅行の意を忘るべからず

らず今日我が國情の婦人に許す範圍に於て成るべく旅行し成るべく多くの事物に觸接して其の智見を開拓するとに勉むべし今日の我が國は米國女學生の如く學友相携へて湖畔天幕露宿の避暑旅行を許せず又歐洲婦人の如く山間天幕旅行の大膽なしと雖も其の資格に應じ其の身分に應ずべきは勿論なれども成るべく姫樣的旅行を避けて研學旅行の意を忘るべからず

山旅 教定  
麓まで峰よりみゆる里もなかな  
ゆきしは遠き山路なりけり  
海旅 頼阿  
波間より出ける月を船さめて  
山の端見みゆる方を待つかな





火 山 國

東洋の花彩鳥と稱せらるゝ我日本帝國は世界稀有の火山地方にして『東洋之火山國』とも稱すべし、されば邦人にして火山てふ概念なき者は殆ど之れなく、或は遠く噴火孔に臨み、彼のすさま敷猛勢を以て噴騰する蒸氣を、或は又身親しく噴火孔に臨み、彼のすさま敷猛勢を以て噴騰する蒸氣を目撃し、實際に地球内部に猛熱の存在する證左を認めし者もあらん、我國にては、よし火山に遠き地方にても五十里と火山を隔つる地は甚た稀なるべければなり。

故に本邦人に於ては火山は既に珍らしくもなき地理上の一現象なれども、火山に乏しき外國人等が始めて我國土を陥みて富士の美はしき圓錐體をなして霄漢に聳立する景を望み、曾て火山は模型として觀た

る其實物が眼前に迎ふるに逢ひ、又一方には學校に於て教師の講義に「山の頂巔に火口ありて常に烟を噴く山あり」と聽きて、眞にかゝる奇怪の現象ありやとまで疑ひ居たるに、現に烟の噴騰する山岳あるを見ては、眞に物珍敷も又愉快に感ずるとなり、而して此の感は好奇心となり、又此好奇心に驅られて、其實地を探檢し、進んで此の奇怪なる現象を研究せんと企て、足一たひ日本に踏み入りし者は、必ず火山踏査を試みざる者尠し、余嘗て阿蘇山下の第五高等學校に在職せしが、該學校は阿蘇登山の道に沿へるを以て、往々此等の登山者あるを見るに、或は白頭の老翁あり、或は妻女を携ふるあり、或は妙齡の女子等をも携ふる者あり、て、飯途は多く學校を訪ひ、火山の質問頗る精細に亘る事ありき、彼等は斯の如くして火山智識を日本漫遊の好土産として携へ歸るなり。

然るに我國人は前に述ぶるが如く、火山に就ての觀念はなきにあらざ



れども、火山に就き正當なる智識を有する者は却て妙きにはあらざるか。又我國人は既に火山を以て珍奇のものとなせず、故に此の現象を究めんとする者亦稀なるにはあらざるか。富士道者、淺間道者、御岳道者はあれども、彼等の多くは火山としての現象を實檢せんとはならず、淺間大明神に詣て、或は御來光を拜せんとする迷信者流なり。されば火山の好標本の間に日常起居しつゝある國民にして、却て無火山國人の火山解説を謹聽するが如き奇觀は本邦學術の爲め耻辱と謂はざるべからず。

以上前提詞の下に、余は我が火山國に就き少しく語らんとす。世界圖を繕きて太平洋ある大海盤の周圍を望めば、山脈並列して殆ど此の大海盤を圍めるの觀あるべし、而して此の並列山脈の性質を見れば概ね火山質ならざるはなし、實に太平の海盤は焚ゆる燄を以て圍まれ所謂太

平洋火環あるもの是なり、今此の火環の連絡を追へば、遠く南氷洋より來り、ニエジラント島より濠洲大陸の東岸に沿ひ、ニエギニア島に渡り、此島の西端に於て左右に兩分し、左に岐るゝ一派はスンダ列島に渡り、瓜哇島に於て最も活潑に發動し、五萬一千方哩の一島の背に一百三十一坐の火山を負へり、是よりスマトラ島に入りても頗る目覺敷カラツン群島より遂に印度に入れり、而してニエギニア島の西端に於て、右に岐れたる一派は、ジロロ、セレベスの諸島より比律賓群島に渡りて、臺灣島の西側を経て琉球列島の西側を沿ふて九州島に渡り、本州に及びて頗る活潑に其猛威を示し、本州の中央に渡り、一派は南に向ひて南洋に渡り、他の一派は尙ほ著しく發動して本州より北海道に入り、千島に渡り、カムチャツカ半島に及び、アリニヤン列島となりて太平洋海盤の北邊を擁して遂に北米に達して其沿岸を走り、遂に南米沿岸を



南走して太平洋を繞り、一大火環を成せり。我日本は實に地質上以上の如き位置を占めたり、故に火山の多きことは世界屈指の地にして有名なる火山のみにて、二百七十五坐の多きに及び、而して我國を通過する火山脈は單一の脈にあらずして、地體の延長に準ぜざる數條の裂縫線あるを以て、地熱は此弱點より噴起して、火山を築成するものなれば、數條の脈を成せり、即ち北日本の樺太山系の峽間に噴起せる火山脈には千島より北海道を横走する千島火山帯あり、之れ殆ど直角に交はる膽振火山脈あり、本州に及べば奥羽の分界線に沿ふて走る那須火山脈あり、其西側を駈越する鳥海火山脈あり、其西海中に佐渡火山脈の並走するあり、又南日本の崑崙山系に沿ふて霧島火山帯あり、之に續きて阿蘇火山脈あり、是れと並走する白山火山脈あり、其東方には乗鞍火山脈の走るあり、而して北及び南兩日本の諸火

山脈は本州中央に相會し、直に南に轉じ本州を横帶するの觀ある富士帯となりて、豆南群島より遠く南洋に走れり、其火山帯の紀事少しく繁に亘るの嫌あれども、普通地文書には記載なき事項なるを以て、其火山脈に屬する重なる火山を擧げて、其連絡を示さんとす、讀者地圖と對照して之を諒すべし、先づ千島火山帯より點檢すべし、千島列島は全島總て火山より成り、數十個の火山あり、此中には活火山も少なからず、今其重なる火山を擧ぐれば、國後島の東端に坐する爺岳とす、其北にル、井岳あり、是より南西に走りてトネトコヌプリあり、其南に羅臼山三千尺に聳へたり、島の南端に油山あり、北海道本地に入れば、根室にラウシ岳あり、釧路に硫黃の産所なるアトサヌプリあり、其西に峙ちて硫烟を噴くを雄阿寒岳とし、四千九百八十尺に聳へ、阿寒湖を隔て、雌阿寒岳あり、其高度は却



て男岳に勝りて五千三百餘尺を抽く、石狩十勝の國界に至ればオプタ  
 テシク、十勝岳の兩峰聳へ、何れも六千尺以上あり、其稍々北位を占むる  
 はヌタカウシエ火山にして七千七百餘尺に峙ち、之を北海道の最高  
 點とす、膽振に入れば別に膽振火山脈の名あり、支笏湖畔に樽前の活火  
 山ありて明治十八年來盛に發動せり、支笏湖を隔てトニニワ火山と  
 相對峙せり、其西のマクカリヌプリは六千四百餘尺の高峰なり、内浦灣  
 に臨みては火山甚だ多く、外人は火山灣(Volcano Bay)と名けた、り有珠岳  
 及び駒ヶ岳の活火山最も著はる、後志にポロヌプリあり、恵山は東南端  
 の火山にして、海中には火山の頂巔を擡たける利尻木、小の三火山島あ  
 り、  
 那須火山脈には斗南半島に恐山及釜臥山の活火山あり、八甲田山、赤倉  
 山、戸來岳之に續き、陸中羽後の境上に焼山あり、『南部富士』の稱ある岩手

山は六千八百尺餘に聳へたり、陸羽の境上に立てる火山頗る多く、中に  
 も駒ヶ岳、藏王嶽最も著はる、藏王岳は六千四百八十尺を抽く、活火山な  
 り、岩代に入れば火山最も多く、會津平野を繞りて十四峰の高山あり、吾  
 妻山は先年爆裂して三浦西山の兩氏の殉學の地なるは世人の未だ記  
 憶より脱せざる所なるべし、之に續く磐梯山は會津群山の盟主にて、海  
 抜六千五百尺あり、吾妻に先だち爆發して多數の生靈を奪へたり、下野  
 には本脈の主山たる那須の活火山あり、其噴出物によりて廣大の那須  
 野ヶ原を作れり、其北の白根山も近年睡眠より覺め合に蒸氣噴騰せり、  
 上野には有名なる赤城、榛名、妙義の三火山鼎立し、是より淺間山の結節  
 點に會合せり、抑々淺間山は八千八百八十尺に秀拔する活潑なる火山に  
 して、我國の中心に位し、又我國を横帶する富士帶の東部に當り、諸火山  
 及諸山脈の集まる所なり、されば此の附近は山又山にして、人烟稀に實



にいたつらに立つや淺間の夕煙里とひかぬるおちこちの山と云ふべき有様に我國山脈を言ふ時は常に此山を結節點と標記せざるべからず那須火山脈は斗南半島より淺間山に至る延長約二百里の間に蟠蜒し九座の活火山と二十四個の熄火山とを負へる火山脈にして銀脈銅脈を地表近く導き來り我國をして大に銀銅の鑛物に富ましめたり鳥海火山脈は陸奥の岩木山を起點とし直に南走して本脈の盟主なる鳥海山に連れり本山は七千餘尺の高峰にして金字形或は臥牛狀をなし頂上多く雪を戴き遠望甚だ豪壯なり月山を経て越後の境上を走りて御樂山明神山吾妻山となり淺間山の結節點に會せり彌彦火山脈は越後の海濱より起り彌彦山米山等より上野の境上に於て白根山となる此山は七千六百尺に聳ゑたる活火山なり是より淺間山の結節點に會す

佐渡火山脈は鳥海火山脈と並趨して羽後男鹿半島の寒風山より起り飛鳥粟生島を経て佐渡の金北上に連れり南日本(崑崙山系)に屬する火山脈の最南は未だ詳かならざれども澎湖島より臺灣の北角に於て大屯山觀音山等となり琉球列島の西側に沿ふて鳥島粟國島となり薩南群島に於て活潑に發動し諏訪之瀬島中之島硫黃島等の活火山あり而して此附近の列島は皆火山島なり是より薩摩富士の稱ある開聞岳及櫻島岳となり霧島活火山に連る霧島岳は韓國岳及び神威彌崇き高千穂峰の兩峰に分れ御鉢と呼はる噴火口より盛に噴騰し遙かに阿蘇山と相呼號せり是れ霧島帯の名あるものなり阿蘇火山脈は肥前の多良岳より起り島原半島に於て温泉岳の活火山となり肥後の濱海なる金峰山より東走して本脈の主山たる阿蘇山に



連る、本山は世界にも稀有の大火山にして舊噴火孔の長徑は六里に及  
び短徑四里になる大火口を有し、此の孔内には今は四萬有餘の生靈を住  
ましめ、又舊火孔には五個の集成火山を生じ、其中岳の新火口よりは常  
に轟然として蒸氣を噴き時としては大噴起を試みるごとあり、是より  
久住山、涌蓋山、鶴見岳及豊後富士と呼ばれたる由布岳となり、國東半島  
の双子山より瀬戸内に突出し讃岐の飯野山、紀伊の牟婁山、三河の鳳來  
寺山となりて淺間の結節點に會せり、  
白山火山脈は石見出雲の境なる三瓶山より中國第一の高山たる大山  
に連りて六千二百尺に聳えたり、間鍋山、大岡山より本脈の盟主たる白  
山に達す、白山は北陸第一の名山にして八千七百餘尺を抽き頂上に數  
個の噴火口あり、遙かに立山と相對す、立山は白山より高き一千尺にし  
て未だ稍々活氣を存せり、此脈と并趨して隱岐火山脈あり、隱岐の島前

島後を噴起し遙に能登半島に連り、鷹爪、鷲巢、法龍の諸火山となる、  
以上樺太、崑崙の兩山系の率ゆる諸火山脈は本州中央に於て相會合し  
て富士帯となる、故に此帯は著しき大火山に富み、高妻、燒山、淺間、立科、八  
ヶ岳の諸火山より本帯の主山なる富士の高嶺となる、富士の頂上は未  
だ蒸氣を吐き其形容の未だ水蝕風化の爲め缺損せざるを以て高且つ  
美なり、彼の雪如、純素、烟似、柄白、扇倒、懸東、海天(石川)と言へる如く、眞に火  
山の標本たり、是より箱根火山となる、箱根も亦頗る大なる火山にして、  
舊火孔内には七湯湧出し、芦の湖湛へ、双子山、駒ヶ岳等の集成火山孔内  
より噴起せり、是より伊豆半島に於て熱海の噴泉を始め、天城山彙を起  
し、伊豆七島の活火山となりて遠くマリアナ列島に走れり、  
我國は實に此の如く火山に富めり、其數に於ては有名なる爪哇にも勝  
りて百七十五座の内三十七座は今尙ほ烟を揚ぐる活火山なり、之を各



土地に別ては、北海道には活火山八座、熄火山三十八座あり、本州には九十七座の火山ありて、其内に十座は活火山より、四國は熄火山のみ三座あり、九州には二十六座の火山ありて、内九座は活火山なり、臺灣には三座を發見せり、温泉は地熱の働きに原因するものにして、小火山若くは準火山とも見るべきものなれば、火山力の如何を知らんには温泉の多少をも究めざるべからず、然るに我國は世人の知る如く温泉甚だ多く、到る處温泉遊浴の快を試み得べく、著名の温泉のみにてても全國に四百五十餘泉に下らざるべく、平均六十方里毎に一泉を有する割合なり、故に火山温泉を合算すれば全國に六百二十七有餘あり、此等は皆地下熱の地面を通じて放散しつゝある穴なり、  
以上陳述の事實は皆我國が世界稀有の火山國たることを證するものなり、斯る天然力に圍繞せられ、先天的に火山力の間に起臥しつゝある

國民にありては、果して此天然力は影響なきを得るか、抑や如何なる人類にありても、其周圍の狀態に感化せらるゝは争ふ可からざる事實なり、彼の漁民が慄慄にして農民の質朴なるは如何、平原住民の潤達にして山地住民の扁狹なるは如何、又何故に歐洲を占領せし、アリヤ種族は剛毅果斷にして山をも海をも呑むべき氣宇を備ふに拘らざ、印度に移れる、アリヤ種族は柔懦恐憶にして二億七千餘萬の人民を有しながら僅々十餘萬の英人に屈服せらるゝに到りしや、凡そ此等の疑問を解せんには直に其周圍の天然力を回顧せざるべからず、されば火山地震の如き大天然力は必ずや人心を支配し直接間接に其影響を與へしや多かるべし、  
我國の山國たるは更に言ふまでもなし、山國なるが故に如何に我國民の山國氣風を帯ひるや、而して我國をして斯く山國たらしむるものは



火山作用の活潑なりしに基因せり。又火山多き故に如何に美形なる山峰なるに到る處に金字形の高峰秀て、或は芙蓉八采の秀姿を望むものは皆生ける火山の模型なり、彼の富嶽の如き如何に日本國民の氣風を養成せしや。我が國民に高潔を貴び節操を重んずる風あるは彼の千秋玲瓏の雪を戴き屹然雲表に抽くの高風に感化せらるゝや深かるべし。其他蝦夷富士、津輕富士、南部富士、丹後富士、小富士、豊後富士、薩摩富士等の諸名山は皆何れも其一部住民の氣風に對する燈明臺たるや明なり。我國は世界屈指の蠶業國なり、其生糸は常に輸出金額の五割乃至七割を占め、世界生糸の供給は我國に待つ所多し、斯く我國をして蠶業國たらしめしは如何、是又火山産物と稱すべし、本邦の養蠶地は中央内地なる火山作用の最も烈しき各地なり、夫れ養蠶の原料たる桑は能く火山灰浮石層に繁茂するを以て中央内地の火山地方に蠶業の旺盛なるべ

きは決して偶然にあらざるなり、而して蠶業の旺盛なるに伴ふ蠶業地方一種の風習を養成せるものも亦是れ火山間接の影響と稱すべきものなり。我國民は比較的宗教には冷淡なり、是れ自然界の宗教觀念を催起すべき状態を見ざるも、其原因ならん、然れども獨り火山作用に至りては頗る古來國人の想像を誘發し恐怖を惹起し驅りて妄想に陥らしめたるが如し、則ち各地高山の頂上よりは猛火を噴き硫烟を揚げ、時としては轟然一爆天地を撼動し田園村里を埋却し、或は熱漿を漂はし砂石を雨らす、が如き現象は、焉んげ昔人の理解力能く及ぶ所ならんや、故に此災害を恐るゝ極は、斯る山嶺には必ず神の存在するものにして、其爆裂するは山神の怒りて人類を懲罰するもなかりと妄想し、之を祭りて其赫怒を緩和し、災害を免れんことを祈り、山岳崇拜は一般の風習となり、火山



には何れも神號を捧呈し淺間大明神富士神社(フジの意はアイヌ語の火鳥)海大權現阿蘇大明神白山權現箱根權現等(或は火山に神)と稱し著名の火山は今も白衣の道者隊を成して登山し尊信薄からず特に火山多き信州甲州兩毛羽州等は山岳崇拜の風習最も熟せり此の如き習俗は火山地方の常にして我國と一轍なり彼の古羅馬人がエトナ火山を以て火神の大鑄鐵場と忘想し之にケイニの名を奉りたるもの遂に今の Volcano に轉訛して一般火山を稱するに至りしが如く斯る迷信は火山國特有と謂ふべし火山國民に通じて歛點と謂ふべきは總て沈重忍耐等永久持續の性質に乏しきこと是なり我國の如く火山破裂の害地震盪搖の災ある所は其風自ら人心に影響し粗雑にして事に耐へず忽ちに熱中して忽ちに冷却すること恰も地下火氣の鬱閉して時を其憤を洩らし忽ちにして

熄滅するに似たりと謂ふべき乎地震の災も之に伴ふて永續的性質を損し一事を企つるにも吾にして若し成らざるば之を子に傳へ子にして又就らざるば之を孫に傳へて永遠に必成を期するが如きは頗る缺如する所にして粗にして拙なるも吾の一生中に遂げんことを冀ひ只其成就の速かならんことを希望し總て早熟早成の弊は或は免れ難き所ならん

明治二十三年我國に始めて立憲制度を實施せられ國會の開設あるや或る外國新聞は之を評して火山地震と立憲制度とは兩立するものにあらず代議制度は質朴節儉にして公共の徳に富み責任を重んずる國民の運用する制にして火山地震國民の如き氣輕にして迷ひ易く且つ氣樂なる國民に適應すべき制度にあらずと論ぜしことあり是れ固より妄評にして日本は勿論火山地震國なれども豈に此の如き憐むべき



國民ならんや、帝國議會開設せられて既に十數回を重ね、其の間國運着々進捗しつゝあるは、火山地震國民も立憲制度に適すると云ふ何よりの反證なれども、我國民たるものは、又常に深く茲に注意せざるべからず。語を寄す火山國の青年子、火山の美を採り、火山の粹を鍾め、彼の玲瓏碧天に卓立する芙蓉峰の秀色と、全然其理想及び其實行を併致せしむべきを務むるは、未來の國民たる青年の責任たることを忘るべからず。



白雲の赤へすたな引く嶺に於て、  
又、すめばすめぬる世にこそ有けれ  
...

### 地形と聯想

總て學術の研究に記憶の必要なことは言を待たずと雖も、地理科に於て特に其必要を感じずべし、地理科の學習には記憶に訴ふる部分頗る多しとす。故に地理を學ぶ者、又は地理科の教授に従事する者は、此點に注意し常に記憶を補助し、記憶を容易ならしむることを工夫せざるべからず。抑々記憶なるものは自己の一度が験したる事物を再び想起する作用を言ふものにして、人の意識は常に是より彼れに轉移して止まらず、一度は意識の中心となりし事物も時を経れば意識外に逸するものなれば、時日を経過して後再び此事物を喚起して容易に意識の中心と爲すことに慣るゝ様練習せざるべからず。斯く記憶作用を發育せしむるには既に究められたる方法順序及條件種々ある中、特に地理科に關



して必要なる條件は聯想是なり即ち今新に知られんとする事物は既に熟知し又は容易に記憶したるものに聯結して記憶を補助し且つ記憶を確實ならしむべきことは是なり是れ地理學習上若くは地理教授上逸すべからざる要件なりとす  
此聯想は地形を記憶する點に於て最も須要なり總て陸地の千態萬狀なる自然の形狀を記憶せんことは頗る困難を感ずるものにして例へば海岸線の形狀の如き或は出で岬崎となり或は入りて港灣となる等種々様々なる形狀は容易に記憶し得らるるものにあらざ然れども之を記憶せざる時は地理學習上最も要用なる地圖描寫は到底爲し得るものにあらざ固より地圖の描寫法は既に夫々法式あれども日常急速に使用する略圖は一々描圖法の如き面倒なる法式に據りて描寫するの暇なしさればとて無意に筆を下さんか似も付かぬ不格好の狂圖

を生し遂に使用に堪へざるべし故に斯る急速の場合に使用する畧圖を描寫する爲めには地形上著しき形狀は兼て之を記憶し置かざるべからず此點に就て聯想の必要なるを覺ゆるなり  
香亭中根淑翁は嘗て兵要日本地理小誌(明治十年版)を編せられ大に此點に注意せられたるものゝ如く余庠序にありて此書を課せられたる頃日夕之を暗誦し大に興味と好奇とを以て之を記し今も尙腦底にありて忘るゝこと能はず例へば日本々州の地形を形容して蛟龍の天に翹るが如しと云ひ北海道を以て赤鯉の尾を振ぶが如しと言ひ又九州を以て立ちて舞ふ猿猴とし四國を以て飛ぶ蝙蝠と言へがる如き實に千載滅すべからざる好比喻にあらざや天に翹る蛟龍と云へば略々本州の形狀を想像し得べく尾を振ぶ赤鯉と聞けば北海道本地の形狀を想像し得らるべし其他猿猴の九州に於ける蝙蝠の四國に於ける大凡



其の形状を想像し得べし。香亭翁は更に一國一州の形状に至るまで之を形容して示されたり。例へば能登を以て人掌の球を受くるが如しと云ひ、相模を以て兜を倒にするが如しと云ひ、武藏を以て木葉の如しと云ひ、甲斐を以て南瓜とさへ云へるが如き諧謔に似て面白し。

比喩を以て地理上の形容とすることは年所を問はず其必要を感ずるものと見え、あきつ(蜻蛉)のとなぬ(唇咄)せるがごとしと詰へるより、今に至るまで地形の形容は尙絶えず、小藤博士は我國を以て弓に喩へ、日本海に引きて太平洋に張り、富士帯を以て箭を注ぐものとせり、又太平洋に浮べる船とも言へり、内村鑑三氏は本州を以て天女の舞ふが如く、北海道を以て大鳥の來儀に譬へ、原田博士は伊豆半島を以て石鏃の如しと云ひ、又石川丈山翁が富士山を形容して雪如、紈素、烟似、柄、白扇、倒懸、東海天と歌ひしが如き、實に火山の好形容なり。されば津輕富士、南部富士





薩摩富士、豊後富士、蝦夷富士の名を聞かば、直に倒扇形を想像すべく、又直に火山たることをも知るべく、地理上逸すべからざる好比喻なり。泰西の學者日本列島が連珠形を以て亞細亞大陸の東邊に掛れる美形を形容して東洋の花彩島 (Festoon islands) と言ひしより、近今一般に花彩島を以て我國を呼ぶに至れり、然れども花彩なる物は我國に用ゐざるを以て、其名を知りて其實を知らず、此好比喻も其真趣を解せざることもあるべし、西洋に於ては祭典式日等には花束を製して、之を壁上等に掛け裝飾となすもの之を花彩と言ひ、我國に於ける七五三飾の如く、其形式其使用共に頗る相似たる者あり、而して我列島が亞細亞大陸の東端に順序正しく千島列島、四大島、琉球列島及び臺灣の三連帯が而かも同一式の彎形を以て掛れるは恰も此の花彩を掛けたるが如しとなり、されば殆ど我七五三飾と同じく、之を日本的に形容すれば七五三飾列

島と言ふも亦可なるべし。

ゼイムス、モンテニス氏は最も初學地理教育に留意せし人なり、其著初



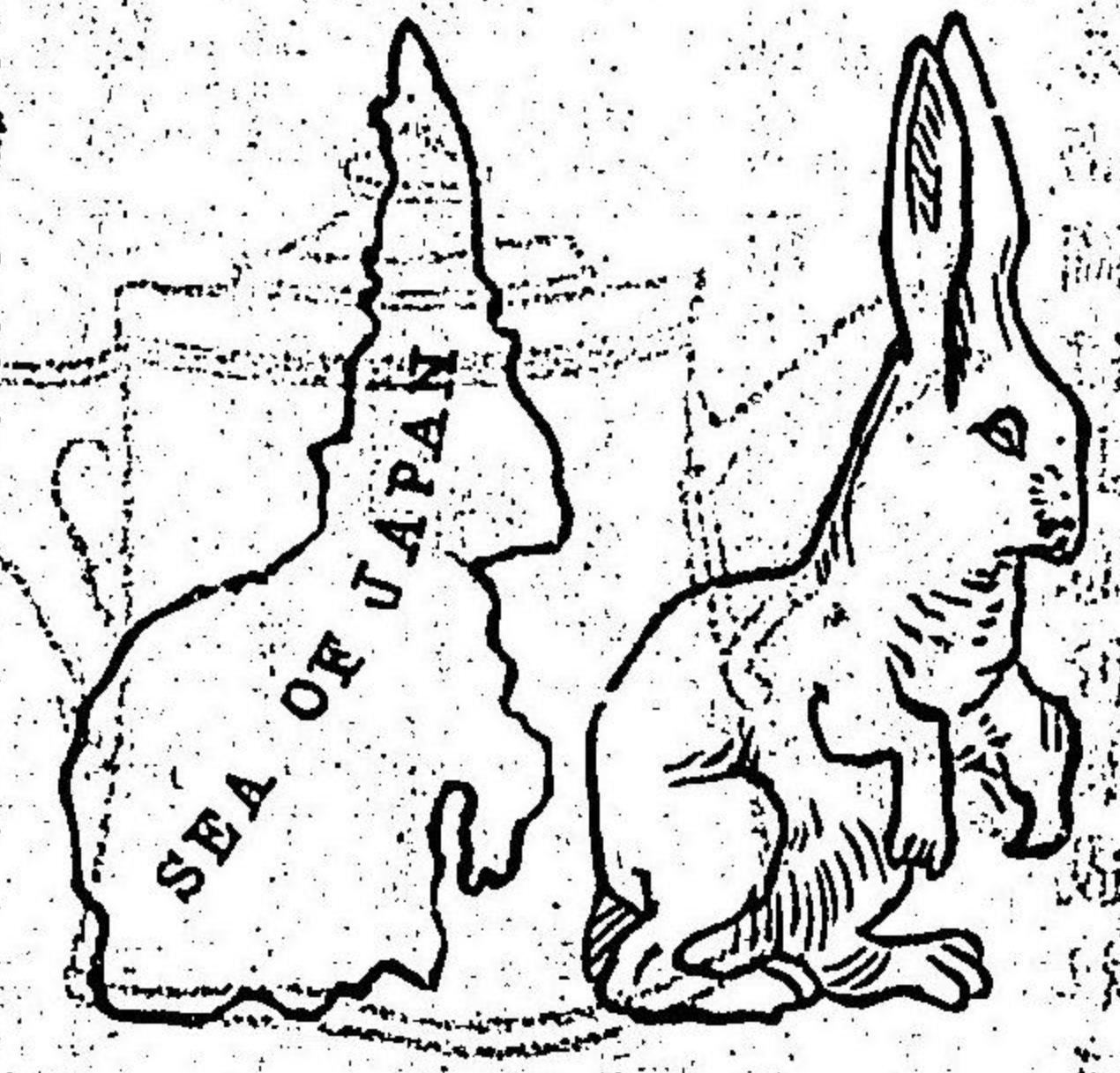
等地理書に於て數々奇想妙匠の比較を生徒思想の範圍に取りて其興味を鼓舞し併せて記憶を助せり、以下掲ぐ

る略圖は其意匠に成れるものなり。

佛蘭西の地形を以て之を水瓶 (Pitcher) に譬へ、其底を地中海に置き、其嘴端はブレスト岬にして把手を獨逸に挿入せり、故に佛蘭西を描圖せ

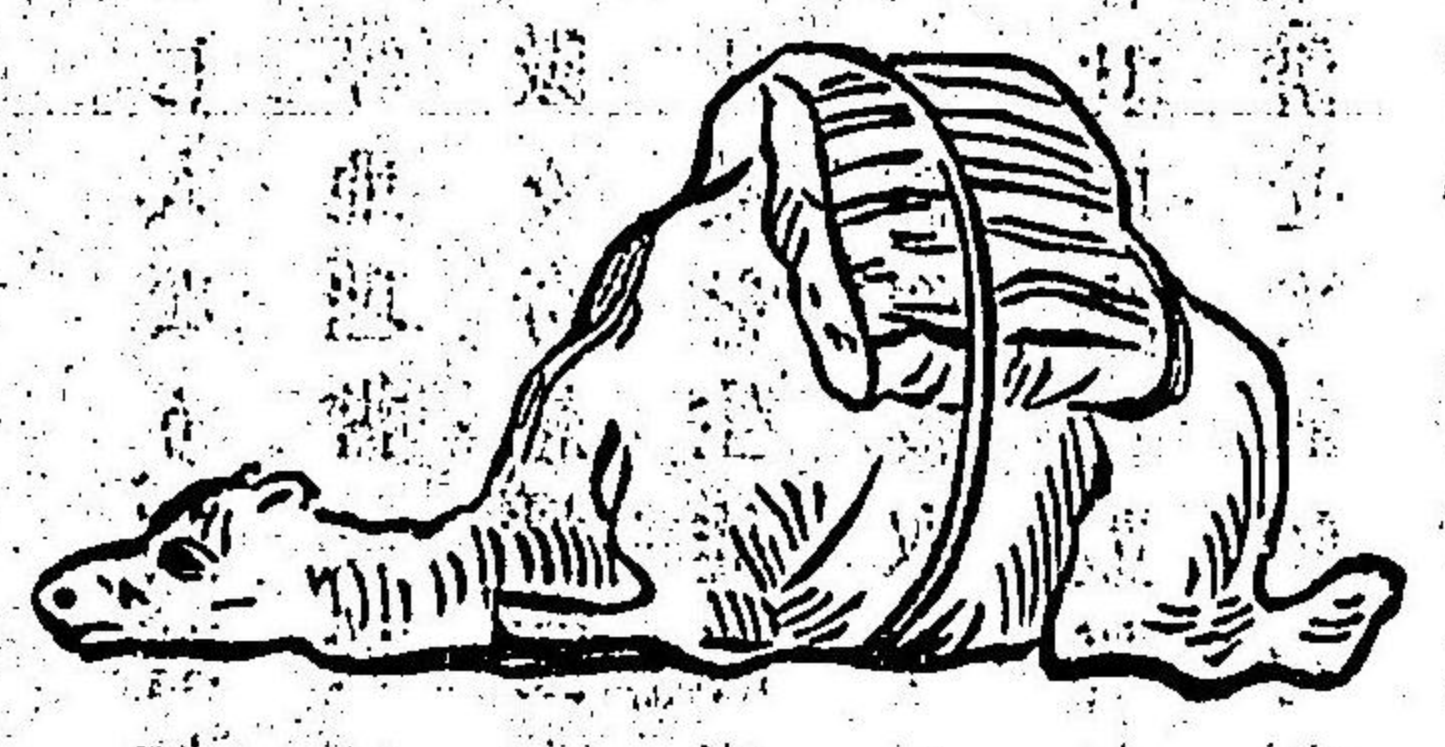


凡此は此水瓶の形を記憶し之れを聯想して水瓶形を白寫するものとせば佛蘭西の圖形は大差なかるべし。



我國と亞細亞大陸との間に湛へたる日本海は之れを兎に譬へ兎海と云ふ其長耳を大陸と樺太との間

に挿み其面は北海道の西岸と境して口頭を石狩灣とし其右手を舉げ北越中灣に措き右足を若狹灣に踏

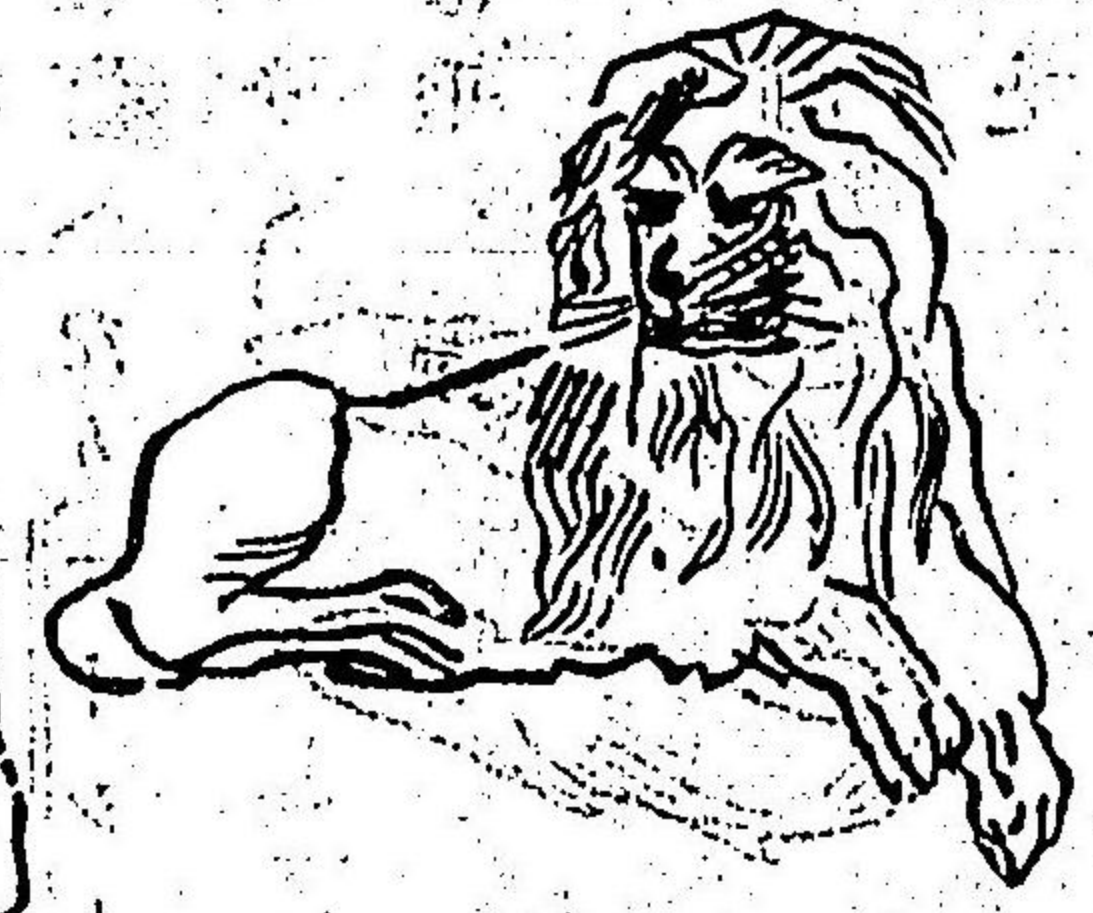


む其尾を朝鮮海峡に託して亞細亞の大陸を背北濱より



新幾内亞島を以て七面鳥 (New Guinea hen) に譬へ

北亞米利加のビルマニア州を以て駱駝 (Camel) に譬へ



其尾を以て嘴とし其頭をシシイ島に譬へ



北米のオンタリオ湖を以て背を曝らす海豹 (Seal) に譬へ、ペトル岬出

て、頭と背とを限り、オスエゴ市其足に當り、ミルトン市其尾端たり。之

に譬へたり、ブツワロー市其唇頭に當り、ロンクボイ

ント出て、頭と脊とを分ち、タイアガラ瀑布は吹ける

湖水にしてセントクラリア湖は振へる尾端なり。

西印度のキューバ島を以て東方に走る蜥蜴 (Lizard) に譬へたり、マイシー

岬は其頭端にして、ズルス岬右の前脚となり、ルクレチ

ヤ岬其左脚たり、ゴルダボイ岬其後脚にして、尾は垂

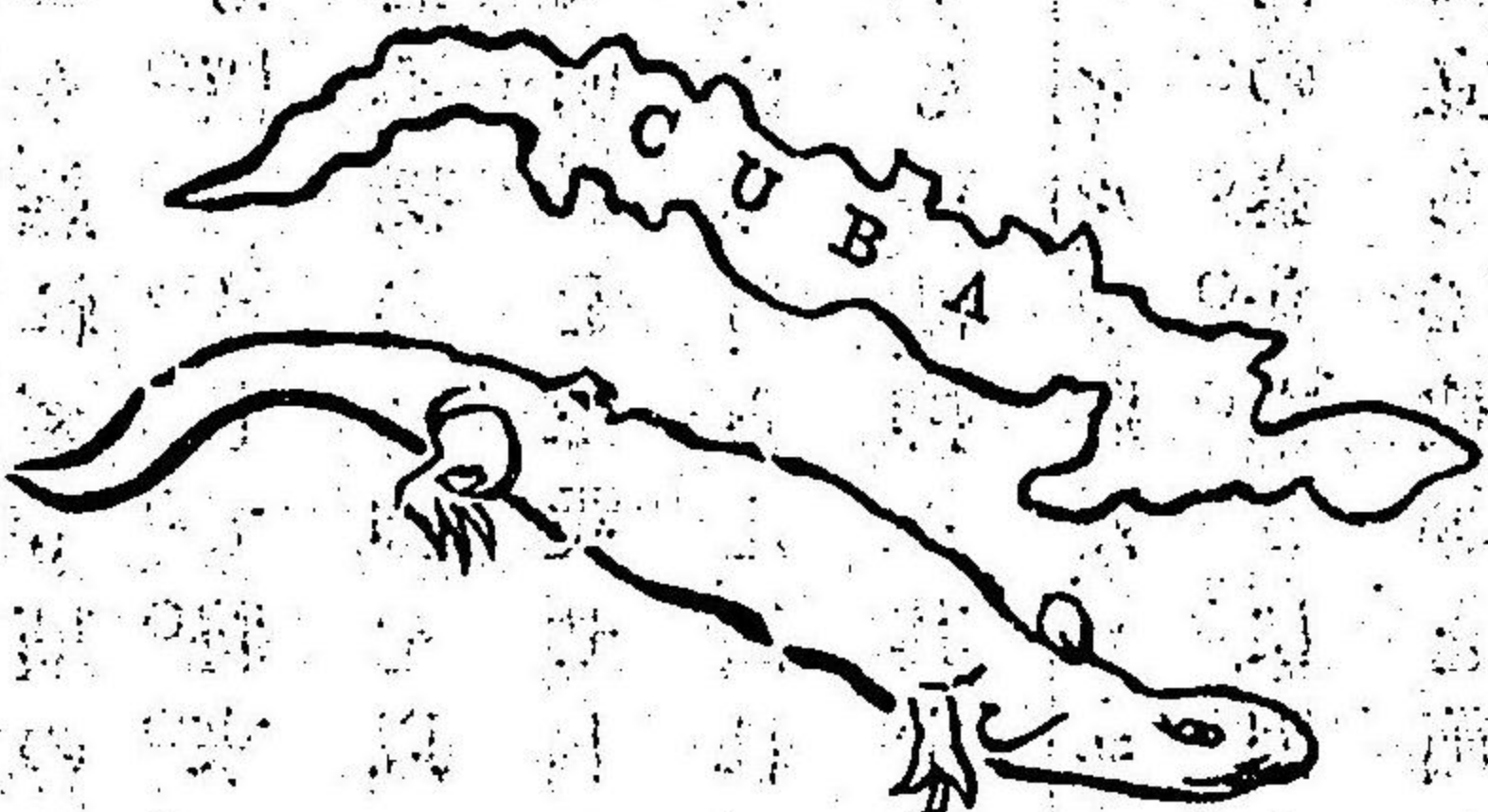
れてサンアントニオ岬となる。

伊太利半島とバルカン半島との中間に湛へたるアド

リアチツク海を以て鯨に譬へ之を鯨海 (Whale Sea) と



之を示さば學習者は一層の興味を以て之を  
迎へ其好果を收むること蓋し豫想の外なら



云ふ頭はペンス灣にして口を開きてイストリア

半島を含み其尾はアディオニア海に出づ

此の如き無邪氣なる比喩は初等並に中等の生徒

にありては頗る興味を感じる事にして是れによ

りて其地形の概略が永く記憶に存すべきこと疑

なかるべし意匠豊富の

士請ふ此例によりて其

府縣を形容し其國郡其

町村其山河を形容して





伊能東河

幕末の一偉傑、東河伊能忠敬先生の事蹟は業已に世に紹介せらるゝ所なり、然れども斯の如き本邦に於ける特殊なる俊傑の偉行は我國民の好模範として將來の國民を陶冶せざるべからず、アリヤ種族が能く堅忍不拔の精神を以て學術に殉し、事業に殉し、以て第十九世紀の科學的文明界を建設せしものは、彼種族の性格或は先天的に其傾向を有することゝもあらん、然れども彼等をして足並を揃へて同一軌道を進ましむるものは、抑々其由來なきに非ず、即ち、コルペルニカス、ヤガリレオ、ヤケブレル、ヤ將た、ニユートン等の諸先輩ありて、夙に好模範を垂れ、彼等性格の泰斗たるに因らざるば、あらず、我國も將來は益々此等文明國の間に立ちて、彼等と衡を争はんには、是非とも堅忍不拔、殉學殉業の大精神

を要す、而して此大精神は最も我國民に欠如する所なることは、歴史の示す所なり、古來非常の際には君の馬前に打死するを知れとも、學を講し、理を究め、孜孜として終に之に殉する人少し、又事若し成らざる時は、腹十文字に掻き切りて世に其不明を謝するの勇あれども、而かも七顛八倒遂に能く絶世の大發明をなし、或は大事業を興し、後世を益せし大勇者少し、されば伊能忠敬先生の偉蹟の如きは、最も我邦人の爲し難き所をなし、先生の氣質は最も我邦人に欠如せる性格を有したる俊偉なれば、斯る偉人の偉蹟は常に學校の修身講話の材料に供へ、學生を陶冶せんことを望む、余曩日佐原に至り、先生の舊閭を訪ひ、親しく先生の苦學苦心せし遺物を觀、從來欽慕の念をして一層深からしめたり、故に今其由を概記せんとす、伊能東河先生は實に本邦地學の鼻祖たり、我輩後學先生の風を慕ふや



久し、明治戊戌の秋先生の舊問なる下總國佐原町に遊び、先づ先生の故棲を佐原町脇橋畔枕流の所に訪ふ、先づ刺を通ずれば現主直に出て迎へらる、現主は先生の曾孫源六氏なり、予來意を告げ先生の遺物を觀んことを請ふ、氏歡諾して其所藏に係る先生の肖像、實測輿地圖三幅、遺筆(簡宮倫宗の樺太行を送る序)及び測地に使用せられし大方儀測距器等を示さる、予今此等の遺品に對し感慨曷ぞ堪へん、此等の遺品は實に我國一般に使用する所の日本地圖の胚胎せし物、之を千歲不朽に傳へ、以て我帝國學問の獨立を誇るべき我日本國の貴重品なり、

先生は原と神保氏、上總國武射郡小堤村に生る、後出て、伊能氏を嗣ぐ、伊能氏は世々佐原の右族なり、先生の前半生は經世家又慈善家として知らる、先生伊能氏を嗣ぐに及びて、家道を隆興するを以て志とし、躬を以て率先し、拮据黽勉、且つ儉素を務め奢靡を禁ず、是を以て家道日々に

揚る、天明年間關東の飢饉に際し、再度私費を發して窮民を賑はす、郷里其徳に浴して幸に餒えざるを得たり、

先生素より天文及數學を好む、然れども家政の爲め其志を専らにすること能はざるを以て、家事を子景敬に委し、歳既に五十、飄然江戸に出て師を覓む、當時我國の情狀たる固より先生の知さ精緻の腦力と科學的思想とを有する人の師となりて、其意を満足せしむるに足る者なし、偶々浪華の人高橋東岡幕命によりて江戸に來る、東岡は頗る西洋の曆法、數理に通ず、先生就きて學ぶ、昔學凡六年、學大に進み、東岡も後必ず先生を推すに至ると云ふ、

此時に當りて我國に實測の日本地圖あることなし、偶々似而非地圖あるも固より無稽是を以て我國の形勢を知る者なく、酷に之を言へば殆んど我國形の方圓だも辨せざりしもの比々皆是なり、



先生夙に我國沿海實測の大志あり寛政十二年(今より百四年)幕府先生に命じて蝦夷沿海(北海道)及び北陸道を實測せしむ先生時に歳五十六踊躍して直に大方儀(先生の意匠創造に係る物今の六分儀キヌメ)の用をなすもの測距器(同じく先生の工夫に成る之を以て距離を測る)等の測地器を携へて途に上る當時北海道の事状たるや内國人の足跡を印せしは多く口蝦夷にして奥蝦夷に至りては熊笹深く茂り猛熊之に伏し土人も甚だ稀なり先生曠野を跋渉し或は風濤荒き北海に帆船を泛べ具に天然の抵抗と戦ひ遂に東南岸の實測を了る次て又海路を轉じて北陸道に至り其沿岸の實測を了る之を先生第一着手の偉業とす越へて享和元年(今より百三年)再び命によりて豆相、總諸國及び陸奥、磐城、陸前、陸中、陸奥の沿岸を實測し次て三たび命によりて羽越能、佐渡及遠參尾諸國の沿岸を測り一大地圖を製す文化五年(今より九十六年)四たび命によ

りて山陰、山陽、西海の三道及び其の屬島を實測し文化十二年(今より八十九年)五たび命によりて豆南、七島、箱根湖及江戸府内を實測す是に於て我日本版圖の北は蝦夷の端より南は薩南群島に至るまで沿岸周圍凡そ七千餘里先生の足跡を印せざる所なきに至る而して其間實に十有八年なり嗟十有八年其歲月長からざるにあらず而かも七千餘里の長汀、曲浦を殆ど獨力獨行を以て悉く實測せしを追想すれば實に神腕鬼脚とも謂はざるを得ず而して其實測の結果は今日歐米の精器を用ひ數百の手と鉅萬の財と十數の年月とを以て實測したる地圖と比較するも經度に於て其差僅に分(一度の六十分の一なり)に超へず先生の業亦偉なりと謂ふべし聞く明治の初め新に軍制を定め陸軍教師を佛國より聘す教師先づ地圖の必要を説き日本地圖の有無を問ふ當事者先生の輿地全圖を以て之に示す佛人驚歎して曰く貴國にして既に這



般の精圖ありや然らば今更に測地の用なしと其精確知るべきなり  
先生沿海の實測漸く了り文政元年齡七十四にして病に罹る其四月病  
劇しく殆ど起たず而して製圖未だ全く就らず其憾想ふべし然るに命  
なる哉天此偉人に餘命を假して絶世の業を成効せしめんとこの意か幾  
もなく病大に怠る是を以て其業を續ぎ遂に文政四年七月を以て輿地  
全圖完く成る是れ即ち我日本帝國全圖の後世に模範を垂れし原圖と  
す而して先生其九月四日を以て天命に安んじ溘焉として逝く嗚呼先生  
は實に我帝國地圖と共に終始せし者と謂ふべく而して又我帝國地圖  
は先生後半世の化身と謂ふべし東京芝公園内圓山の伊能先生測地遺  
功表に曰く蓋し先生没してより今六十年を闕す外交漸く盛に兵備を  
修め商業を營み航海來往多く其圖に依る嗚呼偉なる哉と實に然り今  
日國運日進に際し兵事に商業に交通に將た學術に地圖の用甚だ切な

り先生の此遺功に浴する其れ幾何ぞや又佐藤一齋翁所選の伊能先生  
墓誌(東京淺草清島町源空寺境内に在り)に曰く君の稟賦朴直精力人に  
過絶す齡七旬を踰ゆ鬢霜皤然として肩に被る而して其意氣蓬勃少壯  
人の如し測量の命下る毎に輒ち喜色顔に見はれ不日にして發す乃ち  
躬險阻を歴海濤を凌ぎ奔走數十百里風雨寒暑未だ嘗て少も沮喪せず  
何ぞ其氣の邁にして事を之れ勤むるやと先生の此雄風を聞かば懦夫  
と雖ども爲めに起つべし予等今先生が嘗て起臥せし故棲を訪ひ其曾  
孫に會して親しく其居常を聞き更に雄威なる先生の肖像に對し又嘗  
て先生が親しく携へて北海の蠻霧南溟の瘴煙間に漂泛せし遺品を覽  
今更に感奮欣慕の念益々切なり我國民は先生の精神行爲を以て千歳  
の下生ける好模範として之を仰ぎ之を學ばざるべからず誰か言ふ舊  
日本の學海に人なしと此老偉人あり誰か言ふ東洋に殉學の人なしと



此老偉人あり、

古の人に逢ひ見る通ひ路は

まともな夢のうちにそありけり



氣 候 風

氣候風の我日本に風化を與ふるや甚だ深し其氣候に於ける其風母に於ける其生業産物に於ける將た國民の氣風に於ける若くは其習慣風俗に於ける悉く其影響風化を被らざることなし而して氣候風の風化を被る所獨り我國のみならず此風の流行する亞細亞各地は皆齊しく同一の影響を受け而かも其風化の傾向は殆ど同一轍にして世に所謂亞細亞風なるものを養成するは至れり故に亞細亞風とは即ち氣候風にして亞細亞諸國即ち氣候風諸國と換言すとも亦不當ならざるに似たり

抑々氣候風とは或る期節に於て吹き流行る一種の特風なり我國にては毎歳夏期に及べば西南方位より吹き來る定風にして今や吾人が浴



しつゝある風なり此風や氣候の寒暖に應じて其方位變更するを以て氣候風の名を與へられ或は暑候の半年は西南より吹き寒候半年は殆ど其反對より吹く風なるを以て半年風とも稱せらる又其交代するや曾て其期節を誤らざるを以て信風の名あり又モンスーン(Monsoon)と稱するは原と亞刺比亞語の歲の一部を意味せる期節或は氣候の意義ある「モンシム」(Moussim)より轉訛せしものにして亞刺比亞地方に於て最も著しく此風を感じるを以てなり

氣候風の流行する場所は亞刺比亞海及印度洋附近を以て最も顯著なる範圍とし延ひて北太平洋及日本海の南部に及びり地方を以て云へば西は阿非利加東岸より亞刺比亞印度各地東は支那東南岸より日本の西南部の海岸海面に及びり

氣候風の起る原因たる彼の晝夜交代に起る海風陸風と其原因を同ふ

し、全海海面と陸面とによりて熱の受領上に差あるを以てなり冬期太陽南半球に直射する時は亞細亞大陸の地盤は非常に冷却して氣温沈下し空氣亦乾燥して高氣壓の中心となり風は此部位より八方に轉流し附近の各地にありては皆是より流出する寒風を被ることとなり支那に於ては北若くは北東位となり我日本に於ては此風位北西方に當るを以て北西の寒風を被るは世人の能く知る所なり然るに太陽北進して北半球に直射するに至るや海面は左まで俄に其熱に感せずと雖ども固體なる陸地に至りては直に其熱に感し中央亞細亞の陸幅廣く且つ其中央に散漫せる其質疎鬆の沙漠にありては熱を感じることを一層速にして太陽の熱を受けては發散し發散しては空氣に分與するを以て空氣は忽ち高温となりては輕浮し上昇運動を起すを以て此部位の氣壓は非常に輕減して低氣壓の中心となり四近の空氣を此部位に



誘引するを以て、附近の大氣は此氣壓中心に向つて流入し其方位變じて冬期の風位とは正反對となるべし、即ち亞細亞南部各地は南若くは西南位の方向を取りて海より陸に向へり、是れ我國夏期の定風にして西南氣候風と稱するものなり、西南氣候風は蒸發盛なる印度洋上を吹掃する風なるを以て、濕氣を含むこと頗る夥しく、北方に進んで陸地に近づくに隨ひ、漸く凝集を始め、黒雲重積して電光雷鳴交々起り、陸地に入りて遂に沛然の大雨を降らすべし、是れを風位の西南に變更する際即ち五六月の交とす、是れ所謂梅雨なるものなり、梅雨は印度支那日本を始め南亞細亞地方所謂米産地の稻作を助くる恩雨にして、此霖霖あるか爲めに南亞細亞第一の富源たる夥しき稻禾を涵養せり、若し此恩雨無かりせば、養水欠乏して、插秧を得ず亦稻禾を

養ふを得ざるべし、然るに時插秧の頃に及べば西南風は梅雨を齎らし來りて、充分の養水を供給し、稻禾既に長して水を要せざるに及べば梅雨も亦霽れて土用の炎暑となりて、稻を養成するは、漫然造化の妙用と謂は、言へに氣候風の德澤と謂はざるを得ず、其證左には、米産地は氣候風流被の範圍に限れるによりて、知り得べし、故に南亞細亞は米産地にして、其人民は米食種なり、米食種なるが故に人體の色素は黄色なりとさへ立言する人あり、然らば則ち氣候風の影響は亞細亞風、米産地、米食種、黄色人種の關係をなすべき歟、氣候風は温暖の濕風にして、頗る不快なり、北西の冷風より此風に代れば、氣温俄に高まり、濕氣の多き爲め、身體の不調和を感じ、心氣亦活潑を欠き、解體遊惰の狀となるべし、之を冬期の我國民と夏期の國民の狀態とによりて徴せよ、殆ど別國民の觀あるべし、勿論此等の現象は氣候風



の作用のみと謂ふを得ざるも、夏期をして永からしめ、且蒸煩ならしむるは、確に氣候風の作用なり、氣候風の及ぶ所、衣は嚴正の服に堪へず、輕薄にして緩潤なるを用ゐ、食は膏味の動物性を採らずして、淡泊なる植物質を要し、居は防寒よりも寧ろ暑熱を避くべき、通風の建築とし、勤勞して生活の高からんよりは寧ろ放逸にして貧窶の状態に安んずるが如き、氣候風國滔々皆然らざるなし、氣候風の最も流行する印度、暹羅、亞刺比亞、安南等は悉く此氣候風の爲めに風化せられ、遊逸怠惰遂に國風となり、彼れが如き状態に陥るに至れり、氣候風國民は須らく用意する所なかるべからず、

若し我國をして他の亞細亞各地の如く、氣候風期をして今少しく永からしめんか、國民の氣質は薄弱となり、非劣となり、勤勉勞力は其幾多を減じて、國運遼巡すること恐らくは他の亞細亞諸國と一般なるべし、幸

に我邦の西南氣候風期は永からず、依りて氣候風をして我國風を養成する迄の勢力あらしめず、よし氣候風期間は一時遊惰放逸百業半ば休止の姿を呈するも、忽ちにして金風(北西風)梧葉を動かし來れば、心身爽快となり、復び前途多望の進程に上るの勇氣を恢復するを得るは、是れ我國の東洋先覺國たる所以のならん、

凡そ氣候風の如き無形の天然力が、人事に及ぼす勢力は實に意外に強大なるものなりと雖ども、其影響は目直に之を視るを得ず、又耳直に之を聽くを得ず、只人間微妙の間に働くを以て、人の注意を惹くこと適切ならずと雖ども、總て天然の勢力に圍繞せらるゝ人事は、皆天然の作用に風化せられ、其慣習風俗等を養成せらるゝことを思はざるべからず、則ち風なる一作用も、其人事と關係あることは通常慣用の套語によりても徴することを得べし、例へば風の勢力が人事を同化する時は、之を



風化若くは風被と言ひ其一邦國內を或る事情に同化したるを國風と謂ひ其住民の化育せられたる性質を指して氣風と稱し其容貌所作の上には現はるゝものを風俗風習或は風體と呼び又國土と入事との關係に就ては風土と言ひ其國土の地容に現はれたるものは風景風色若くは風光と稱するが如く皆風の入事に及ぼせる勢力を言ひ現はせるものなりされば我國に流行する氣候風なる一時期風亦教育家と顧の値なくんばあらざるべし

風そよぐならの小川の夕暮は  
風そよぐならの小川の夕暮は  
風そよぐならの小川の夕暮は  
風そよぐならの小川の夕暮は  
風そよぐならの小川の夕暮は



曆

曆は我地球及び他の天體の運動に關して算出せる時間の自然的區別を計算する方法なり而して時間を計算するには其標準なるべからず然るに地球は太陽を二週するに其時間常に同じく其間氣候の變化及び其他の現象の循環も亦同じきを以て此公轉の時間を採りて標準となすは最も精確にして便利なるにより之を一の標準として一年と名づく  
年には數種あり今日吾人が奉ずる曆年は太陽が黃道の春分點を經過するに起りて再び春分點に歸るに終る時日を云ふ故に回歸年と稱し或は太陽年とも云ふ其の時日は三百六十五日五時四十八分四十八秒なり又太陽が一恒星と會合して再び同恒星に會合する時日を恒星年



と云ひ其時日は三百六十五日六時九分十二秒なり、即ち恒星年は回歸年に比して二十分二十秒に長し、是れ春分點は年々凡そ五〇秒(度の)づつ退却するものなれば、太陽が春分點を出て、春分點に歸る時日も年々少々づつ早まりて現今は既に此差を生ずるに至らしなり、地球には亦軸によりて回轉する自轉あり、其一回轉の時間も常に同じく、且つ一回轉の間に晝及び夜なる著しき現象あり、此一回轉を以て時間と計算する標準となすは最も精確にして便利なるを以て之を一の標準と定め、之を一日と云ふ、日にも亦數種あり、太陽の天心子午線を經過するを以て第一時とし、再び天心子午線を經過するに至る第二十四時を算するものあり、之を天文日とし、又中夜(正子)に起り十二時を算へて日中(正午)に至り之を午前と稱し、次に正午より起り再び十二時を算へて中夜に至り之を午後と

稱するを民用日と云ふ、時間の標準として年は長きに過ぎ日は短きに失する場合あるを以て又月を置く、月の標準には種々あり、新月より起りて再び新月に歸るに終るもの(即ち太陰月)或は太陰が或る恒星と會合して再び同恒星に會合するに終るもの(恒星月)其他數種あり、吾人の奉ずる月、即ち曆月は第一月第二月等より成りて各月の日數同じからず、一日と一月との中間の期限として週あり、週は七日より成り七値或は七曜の名あり、週は日月年の如き天體の運行と關係あるものにあらず、七曜の名稱は古昔埃及人の知れる七天體の名、即ち日月火星水星木星金星土星の名稱を藉りて日に命ぜし所なり、羅馬人も埃及の名稱を襲きて之を改めず、支那にも傳來して我國に於ても之を襲用したり、世界各国には數種の曆あれども其重なる曆は太陽曆、太陰曆、回教曆な



り太陰曆は太陰が我地球を二十九日十二時四十四分餘を以て一週回する時間を單位とし之を一ヶ月(大月三十日)と定め年を算出するが故其計算精密ならずして幾分(四分)の餘剩あるが爲め殆ど隔年(二十八ヶ月毎)に閏月を置かざるべからず且つ氣候に關係なき太陰回轉を標準とするを以て季節と合せざるの不便あり此曆は支那に行はれ我國にも久しく之を採用したる舊曆是なり

回教曆は太陽が黃道の第一宮白羊宮即ち春分點に至る時を以て年初と定めたる曆にして専ら回教諸國人民の奉ずる曆なり又亞米利加土人及波斯人も春分日を年初としアビシニア人は二月二十三日を以て年初とし一年を二十個月に分ち土耳其人亞刺比亞人は七月十六日を年初とし埃及人は秋分日を年初とす猶太人は僧俗曆を異にし僧は三月十八日俗は九月十一日を年初とす

太陽曆は太陽が黃道を回轉する(實は地球が太陽の周圍を旋轉すれども太陽の視運即ち太陽が回轉するものと視做せしなり)時限を以て基とするが故に氣候の變化等と合し最も便利なる曆なるを以て文明諸國は皆之を奉ぜり

太陽曆は西曆紀元前四十六年(崇神天皇の朝羅馬王シユリアスシーザ)の創むる所なり當時羅馬は一種の太陰曆を奉し曆の混亂甚しかりしを以て曆年を整頓するが爲め紀元前四十六年を四百四十五日(即ち混雜の年)とし翌年以後一年を三百六十五日と定めたり然るに地球の一公轉は三百六十五日と五時四十八分四十八秒(回返年)を要するを以て年々五時四十八分四十八秒の餘剩ありて四年を積めれば二十三時三十六分三十二秒即ち殆ど一日となるを以て四年毎に一閏年を置き一月は三十一日二月は廿九日閏年三十日三月三十一日四月三十日以



下奇數の月は大、偶數の月は小と定めたり此曆を「ジュリアン曆」(Julian Calendar)と云ふ、但し其後オクタヌス帝の時、平年は二月を廿八日とし閏年を二十九日とし、而して八月、十月、十二月を三十一日とし九月十一月を三十日と改めたり、（此曆は西暦一千五百八十二年以前に用ゐられたる）然るに右の如く四年毎に三十三時三十六分三十二秒を以て一日(即ち二十四時)と算入するが故に實際は毎年に二十三分二十八秒の不足を生ずるの理、（此不足は紀元一千五百八十二年に至りしに其時積もりて既に廿日餘の不足を生ぜしむるを發見したり、是に於て時の羅馬王グレゴリアス十三世は一千五百八十二年の曆より十日の日數を削除することを令じて、其不足を補ひ、且つ四百年毎に三閏年を省きて、又此不足を補はるる曆法に改めたり、之を「グレゴリアン曆」(Gregorian Calendar)と云ふ）「グレゴリアン曆」は現に歐米各國の奉ずる曆にして我日本も亦之を採

用したり、只露西亞、希臘は舊の「ユリアン曆」を奉ずるを以て一般の曆とは既に廿二日餘を後るゝに至れり（露もグレゴリアン曆を採りしは西暦一八〇〇年）我國は明治五年限り太陰曆を廢して、明治六年一月一日以來太陽曆「グレゴリアン曆」を採用せり、明治五年壬申十二月九日の詔勅に曰く「朕惟ふに我邦通行の曆たる太陰の朔望を以て月を立て太陽の躔度に合す故に二三年間必ず閏月を置かざるを得ず置閏の前後時に季候の早晚あり終に推歩の差を生ずるに至る殊に中下段に掲ぐる所の如きは率ね妄誕無稽に屬し人智の開達を妨ぐるもの少しとせず蓋し太陽曆は太陽の躔度に從て月を立つ日子多少の異ありと雖とも季候早晚の變なく四歳毎に一日の閏を置き七千年の後僅に二日の差を生ずるに過ぎず之を太陰曆に比すれば最も精密にして其便不便も固より論を俟たざるなり依て自今舊曆を廢し太陽曆を用ひ



天下永世之を遵行せしめん百官有司其れ斯旨を體せよ』  
 又同時に發布せられたる太政官布告は左の如し  
 一今般太陰曆を廢し太陽曆御領行相成候に付來る十二月三日を以て  
 明治六年一月一日と被定候事  
 一一月三年三百六十五日十二月に分ち四年毎に一日の閏を置候事  
 一時計の儀是迄晝夜長短に隨ひ十二時に相分ち候處今後改て時辰儀  
 時刻晝夜平分二十四時に定め子刻より午刻迄を十二時に分ち午前幾  
 時と稱し午刻より子刻迄を十二時に分ち午後幾時と稱候事  
 一時鐘の儀來る一月一日より右時刻に可改事  
 一諸祭典等舊曆月日と新曆月日に施行可致事  
 右の如く明治五年十二月三日を以て明治六年一月一日と定められた  
 り、而して明治五年の十一月は小の月二十九日なりしを以て十一月に

二日を加以て三十一日に改め、十二月一日となるべき日を十一月三十  
 日とし、十二月二日なるべきを十一月三十一日とし、十二月三日を翌年  
 の一月一日と改め、全く十二月の一個月を除かれたり、是れ恰も古の混  
 雜の年と同じきを以て其前後に亘る本邦の曆數には此日子の計算を  
 要す、  
 詔勅の「四歲毎に一日の閏を置き」云々により閏年は明治九年(神武天  
 皇紀元二千五百三十六年)を始めとし、明治十三年同十七年同二十一年  
 同二十五年同二十九年に之を置き、明治三十三年は閏年の順序なりし  
 が同年はグレゴリアン曆の所謂四百年に三閏年を省くべき年に相當  
 せるを以て明治三十一年五月十日更に左の勅令を發せられたり、  
 神武天皇即位紀元數の四を以て整除し得べき年を閏年とす、但し紀元  
 數より六百六十を減して百を以て整除し得べきもの、中更に四を以



て其數を整除し得ざる年は平年とす、  
 明治三十三年は神武天皇即位紀元二千五百六十年にして、 $(2560 \div 4 = 640)$  四を以て整除し得れども但書、紀元數より六百六十を減じ百を以て整除し得べきもの、中更に四を以て整除し得ざる年に當れり即ち二千五百六十より六百六十を減じ之を百にして除したる商十九は四を以て整除し得ざるが故に平年となるなり、  
 此算法は西曆紀元數を四にて整除し得る年を閏年とし、又四百年間に三閏日を除くの公式によれるものにして、即ち西曆紀元數を四にて整除し得べき年數の中之を百にて整除し得たる後更に四にて整除し得ざる數は平年とするの公式に據れるものなり、而し我紀元は西曆に先のと六百六十年なれば特に六百六十年を減するなり、  
 二年は春夏秋冬の四季に分つ通常三、四、五の三ヶ月を春季とし、六、七、八

の三ヶ月を夏季とし、九、十、十一の三ヶ月を秋季とし、十二、一、二の三ヶ月を冬季とす、されども曆上四季の別は左の如し、(但平年)  
 春季 立春(二月四日)より立夏(五月五日)に至る九十日十九時十分間  
 夏季 立夏より立秋(八月七日)に至る九十四日零時二十六分間  
 秋季 立秋より立冬(十一月七日)に至る九十一日十九時四十六分間  
 冬季 立冬より立春(二月四日)に至る八十八日九時二十八分間  
 一ヶ月は又各々二節に分つ一年合せて二十四節あり是舊曆よりの慣例なり

- |            |            |             |             |
|------------|------------|-------------|-------------|
| 小寒(大寒)月(一) | 立春(雨水)月(二) | 啓蟄(春分)月(三)  | 清明(穀雨)月(四)  |
| 立夏(小滿)月(五) | 芒種(夏至)月(六) | 小暑(大暑)月(七)  | 立秋(處暑)月(八)  |
| 白露(秋分)月(九) | 寒露(霜降)月(十) | 立冬(小雪)月(十一) | 大雪(冬至)月(十二) |
- 又雜節と稱して十二節あり、節分(二月三日)、八十八夜(五月二日)、入梅(六月)



十日(平)夏(生)七月二日(三)百十日(九)月三日(土)用(春)夏秋冬の四回(彼)岸(春)秋二回(社)日(春)秋二回(是)なり(地)

立其小節(一) 立其小節(二) 立其小節(三) 立其小節(四) 立其小節(五) 立其小節(六) 立其小節(七) 立其小節(八) 立其小節(九) 立其小節(十)

春たてとみなし雪けの空の雲

夏衣きていくかにかなりぬらん

残れる花はけふもちりつ

秋來ぬ目にはさやかに見ゆとも

風の音にそ聲かれぬる

冬のくるまき木のつらなすは

嵐に木へむ峰の鹿は

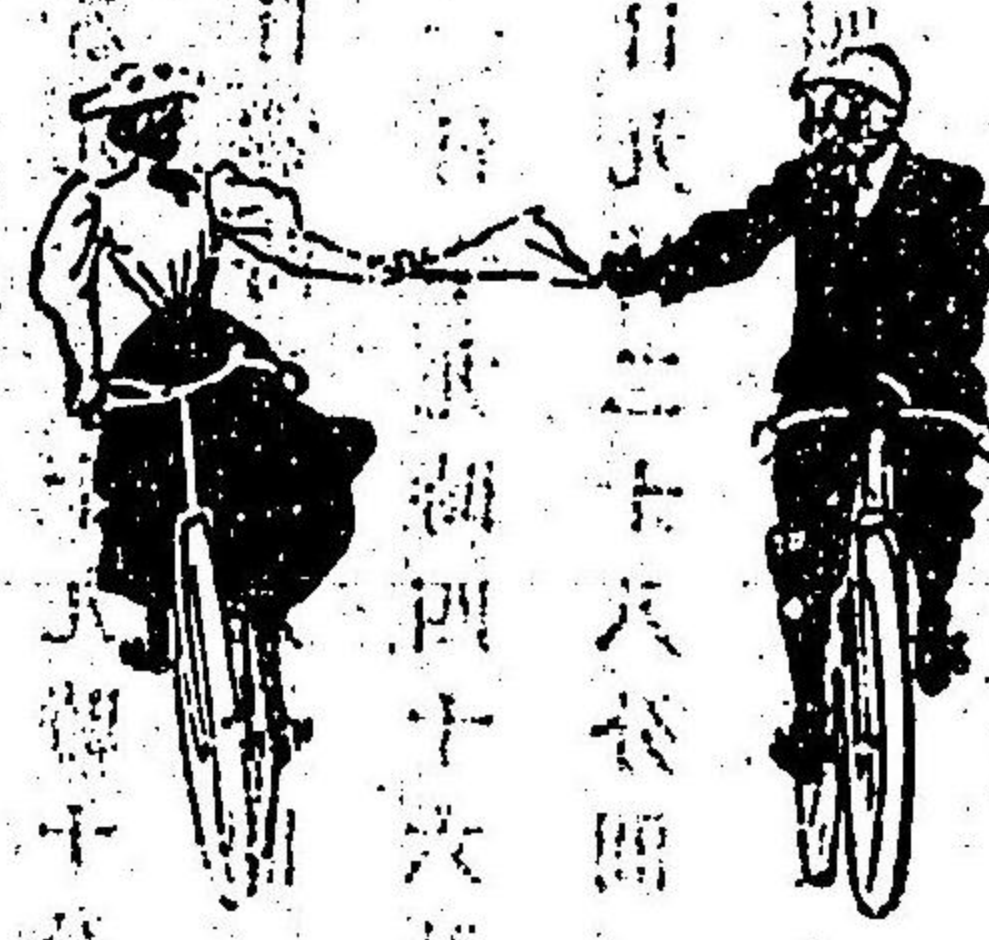
...

...

...

...

...



地勢と國民の性格

太陽の地平線より昇りて再び地平線に没するを仰ぐべき地方の住民は如何なる性質を有するや又月の山端より出で同じく山端に入るを望むべき地方の住民は又如何なる性格を備ふるや彼れ是れの間差異なるべき歟之を實際に徴するに彼れは其地勢の壯大廣遠なるか爲め其間に養はるゝ性質も亦自ら裕達にして其抱懐は世界併呑四海蕩平等の如き絶漠の壯圖を畫き來るを常とすれども是れは眼界の狹隘する爲め人心も又自ら内部に沈み其理想は一小局には轍底すれども遠大の雄志を欠くを常とす故に彼れは實行の民にして是れは理想の民なり彼れの得意とする所は遠征雄略なれども是れの嗜好は専ら文藝技術に趨き易し彼れは危大粗笨にして是れは精細緻密なり彼れ



の古昔に於ける代表民は蒙古平原を馳驅せし韃靼人あり、現今に於てはサーマチック廣原を席卷せしスラヴ人あり、又是れの代表民は賓達山に圍まれし古の希臘人あり、アペニン山脈に横ざらるゝ羅馬人あり、古來平原國民の經營せし遺跡と山陵國人の建設せし遺業とに就て之を觀れば著しく其差異を發見すべし、他の例は譬く措き、今先づ人生經營の蹟なる地圖上の彩色に就て之を觀よ、地勢の規模壯大なる亞細亞洲と地形の構成區々たる歐羅巴洲とは、其邦國の區畫に於て孰れか大に又孰れか小なる、亞細亞は其面積二百六十三萬方里を有する、絶大の洲なれとも、其區畫は十六區に過ぎず、之に反して歐羅巴は面積六十六萬方里(支那より)にして國を列するもの實に二十國なり、故に亞洲の一區は平均十六萬十方里なれとも、歐洲の一區は三萬三千方里即ち亞洲の約五分の一に過ぎず、凡そ邦國の區畫なるものは人類經營の範圍

を顯はすものなれば、邦國の大區なるものは其住民經營の大、即ち言を換れば遠征壯圖に富める人民の住地たるを表し、其區畫の小なるは其反對の人民の住地たるを示すものと謂はざるべからず、是を以て何が故にサーマチック平原に粗大の露西亞帝國あるか、何が故に北米大平原には大陸を横斷する合衆大共和國の存するか、將た又中央亞細亞に大蒙古ある、南米中央の低原に廣大の巴西國あるかは既に余の解釋を待たずして必ず明ならん、然り然らば我日本國は如何、我國の地勢は既に知られたるが如く、到處翠巒の如く亘り青螺嶸嶸として聳へ、其風光に於ては實に一幅の畫圖に異ならずと雖ども、其地勢に於ては則ち所謂山國なり、既に山國なり之に加ふるに又島國なるを回想せざるべからず、我國民の資質凡そ不知するに難からざるべし、我習俗の優美にして美術に長する(外人の評)



は國土風景の然らしむる所なるべく、而かも勇壯の氣象を供へ思慮深くして學術を好み緻密にして技藝に巧緻なる(外人の評)は山國の致す所なるべし、又敵愾の氣概にして愛國心深く、一旦事あるに臨みては外に對して團結甚だ固く慨然身を以て郷土を衛るの風あるは島國なるに由らずんばならず、此の如きは日本國民が其邦土其地勢より感受する貴重の特質にして、是を以て今日の尊榮を保ち、又是を以て現今の繁盛を來せり、然れども其裏面より觀察すれば我國民の弱點も亦國土地勢に感應せることを省慮せざるべからず、  
 島帝國の地勢を見よ、如何に其構造の規模の小なるか、我國土は屢に崑崙山系及樺太山系構成の餘波として紹介せらるゝにならずや、國內の山脈は馬背を分つが如く、國中の河流は溪水に異ならず、其平原は貓額大にして其湖沼は一掬の池水たり、試に思へ我輩が八千八水と稱する

信濃河は其長程に於て、アルカ河の七分一にして、黄河の十二分一なり、又十七條の信濃川を延長するにあらざれば、ミスシッピ河に及ばず、若し楊子江を我國に移さば正に千島に發源して臺灣に注ぐべし、楊子江上流の重慶港を根室とすれば、河口に近き上海は基隆なり、又我平原の規模に於ては尙ほ一層狭小を感すべし、我輩が月の入るべき山もなし、  
 西亞平原の百三十五分の一なり、尙ほ北米ミスシッピ流域は日本全土に七倍し、南米平原は日本全土に二十二倍するを回想すれば、如何に島國規模の狭小なるに驚かざるを得んや、  
 而して我國民は數千年來此間に生れ、此間に養はれ、又此間に死する人なり、其國民氣質の一種の偏癖——即ち島國的根性を帶び、萬事萬端總ての規模狭小にして雄遠壯大の氣なき亦無理ならずと謂ふべし、例へ



は内に政治の得失を争へども對外の政策を講ずる迂なり政黨の流派は多く内政によりて岐れ貿易主義人種問題にあらざ其農業とは毛氈を敷き蓆を展へたるが如き掌大の田圃にして省勞の器機を使用する大農法にあらざ其商業とは國人間の供商賣にして世界萬國を花主とするものにあらざ其工業とは小刀細工の翫弄品にして蒸汽機關の大仕掛にあらず其航海とは島國附近の渡し船にして太平洋航行(近來は外りにあらず其旅行とは箱根日光須磨舞子にして未開地の探検大陸横斷世界週遊にあらず雛形的の機場を有するも實業家にして十里の鐵道を敷設するも亦企業家なり

故に我國民の大てふ觀念に至りては比較的に小なるを知るべく酷に之を極言すれば大なる觀念は全然皆無なるやも知べからず茫漠たる千里の廣野とは關東平原にして洋々たる大河とは信濃河ならん日下

開山の大力士は五尺幾寸の小鋪にして奈良の大佛は古往今來の大像なり一千万の資本あれば日本第一の大銀行にして百艘の船を有すれば無双の大汽船會社なり日本第一の大富豪とは幾何の富を有するか日本第一の大建築とは如何なる大厦なるか日本の大學者日本の大著述果して如何天然既に彼の如し人事豈に獨り此の如くならざるを得んや

更に其好嗜に於ても寧ろ箱庭の泉石を愛すれども却て山高海濶の大風致を賞する者尠し只彈丸黒子の郷土に戀をして足跡島地の外に出でず開散移殖の途なきを以て總ての小なるに似ず唯獨り大陸各地に勝りて大數なるものは人口是なり此の一事は大を以て世界に有名な國なり即ち二萬七千方里の邦土に既に四千二百萬人あり即ち一方里に一千五百五十人の割なり此割合數に超過するは世界中只白耳義



和蘭あるのみ(此兩小國は歐洲大陸沃野の中間にあるを以て恰も我が畿内平原又は武藏野の一小部に住民多きに異ならず)然るにこの千五百五十人の割さへ全國を平均したる數にして北方の北海道南方の臺灣の如き國端に至れば既に住民格外に稀疎にして北海道は一方里に六十九人臺灣は九十人に過ぎず故に其中央の住み馴れし郷土に密居する状知るべし畿内には一方里に五千七百七十五人の割を以て住み東海道には三千六百二十人の割を以て住めり(白耳義は一方里内に三千四百七十八人和蘭は二千二百三十人の割なり)故に人口の密度に於ては世界第一と謂べし是を以て其結果は人民の經營と土地の生産とは其平衡を得ず下層の活路は日に困難を訴へ見苦敷勞働に服する者其數を増し東京に於て人力車夫の數七八萬人に上ると云ふ堂々たる帝國の首都にして其住民の内凡三十人に付一人は牛馬に等しき動物的勞

働に服する者とは慚愧の事状ならずや併しながら是れ只自然の結果と謂ふの外なし小島國人たる者大に省慮する所なかるべからず以上余は島國自然の規模狭少にして模型的なること其間に生ずる人事の規模も亦狭少にして錐形的なることを説き未だ海國の大に天然の殊遇を受け發達の性格を備ふることを説かざりし抑々人は陸に接み陸上に經營すと雖ども其大に利用し得べきものは海なり水なり水上には移動自在の海城を築くことを得べく水生動植の産は地産物と競ふて餘りあり特に海面の茫渺涯限なきは蒙古平原サトウチツク平原將た亞米利加平原の比にあらず而して其交通は滑かにして山岳高嶺河湖森林の障碍あることなく東にも西にも前後左右自由自在にして何物も之を妨ぐることなし故に古來交通史に一大革命を興へ世界の有様を一變せしめたる程の傑物は必ず海國人にあり上古希臘羅馬の



海國が文化の種子を播きたるは言ふも更なり、始めて東洋と西洋との  
 交路を開き東西兩洋諸邦に大革命を加へたる者は、ベニス海市の二男  
 子マルコポーロにあらずや、喜望峯廻航の新航路を開きて世界に大洋航  
 行の模範を示せしものは、イペリ半島の端に住みしバスコ・ダ・ガマにあ  
 らずや、又亞米利加大發見の功を全ふして一新世界を加へたる者は、セ  
 ノア海府の出身なるコロンブスにあらずや、將た世界を一週して、大  
 平面なる世界の迷夢を破り世界の實際に圓體なることを證せしは葡  
 萄牙のマゼランにあらずや、更に又世界を三週航して到る所の未知  
 島、不毛地、武陵桃源を世に紹介せし人は、英島のクックにあらずや、其以  
 下苟も世界革新の動機となりし者は、概ね常に海國人にあり、是を以て  
 古より其時代に於ける交通の集注點は必ず海國にして、又世界の權勢  
 を支配する者も亦必ず海國人なり、

斯の如く海國に有數の豪傑、冒險家、遠征者、探檢家等を出すものは、全く  
 其地勢に産せられたる者なり、海國に住する人は、茫淼たる海を望む毎  
 に、此水の彼岸は果して何處ぞ、是を横斷すれば如何なる所やある等の  
 感念は常に其腦漿を往來する所なり、加ふるに朝に錨を揚げて彼れに  
 駛る船を視、夕に帆を孕みて彼より來る船を望み、益々遠航冒險の情を  
 鼓舞せられ、多一年一日遂に其企望を實にせるものなり、  
 然らば我海國に於ては如何、古來我天然は常に國民を驅りて此境遇に  
 導けり、彼の山田長政の如き、或は天竺德兵衛の如き、又濱田彌兵衛の如  
 き、少くも世界的感念を有せし小コロンブス、小マゼランを生ぜざり  
 しにはあざざりき、是をして天然の示導に一任せしなば、大コロンブス  
 大マゼランを産せしや知るべし、只或る政治的壓抑は之れが天然を  
 掩ひ、遂に處女的陋習を馴致せしは返す返すも遺憾なれ、然れども一た



び其壓抑を去り其陋習を破るに於ては地勢に尊かる。天然の特質は、  
豈に發揮せずして止むべけんや我國民は今正に其第一階を踏める者  
なり我海國男子たる者は水を相手とするの覺悟なかるべからず我海  
國入たる者は常に海を顧みざるべからず



居、俗ヲ易フ

地 震 國

天然力の最も急驟激烈なるものは地震に若くはなかるべし。鎮靜なる  
天地動き搖きなきと思へる盤石飛び起臥を託する地盤陥落し繁榮な  
る都府も一朝にして湖水となり稻麻油をたる田圃も忽ちにして海底  
となる其變化實に意想の外に出で滄桑の變も轉瞬の刹那に認め得  
べし實に猛激にも亦殘虐なる一大作用と謂ふべし。地震は常に其  
抑々地震は世界何れの地にも其勢を逞ぶるものにあらず地震地方  
とて自ら場所を限られたり則ち地震は大海盤を繞れる地方に多し世  
界最廣の海盤たる太平洋を圍める沿岸は地球上最も地震多き地方な  
り次を大西洋の沿岸各地とす此等の地方は自ら連絡をなして地震常  
に頻繁なり時に其沿岸の諸島嶼に於て地震最も多しとす。



我日本國は其位置太平洋の西岸に羅列する島國にして、恰も前述の多震區域内に入れるを以て、地震の多きことは世界に稀なる國なり、されば地震の頻繁なることは吾人の日常認むる所にして、又震害の恐るべきことも既に先天的に我國民の知る所なり、凡そ世の中に恐るべきものはと問へば、地震、雷、火事、雷と答ふるが如く、地震は世の中の恐るべきもの、第一に挙げらるゝを以ても知るべし。古來此の地妖の爲め我國の有形無形に損害を與へたることは、眞に想像の外に出づべし、是を以て地震に關する記事の歴史に存することも亦甚だ多し、然れども上古は固より此等の現象に關して記事の徵すべきものなし、地震記事の始めて記録に上れるは今を距ること一千三百四十年前、即ち推古天皇七年(紀元一千二百五十八年)四月京畿の大地震とす、爾來今日に至るまで約一千三百年間に起り非常の災害を與へたる大地震にして、記録に載せ

たるものみだても三百八十二回あり、即ち平均約三年五ヶ月毎に一回の大震ある割合なり、此等は多くの人命と夥しき財産とを蕩盡せしものなり、然れども以上の三年五ヶ月に一回とは平均數にして、其發起するや固より一樣ならず、又記事の精粗にもよるべしと雖ども、近き時は一年に兩三回も發動し、遠き時は數十年にも亘りしことあり、今過去一千三百年間に起りし大地震に就き其發起の年次を總括すれば左の如くなりし(日野又雲氏調査地震集覽に據る)

- 二年二回を發せしこと 四十四年
- 一年一回を發せしこと 三十八年
- 隔年に發せしこと 六十九年
- 三年を隔てしこと 四十二年
- 三年を隔てしこと 十九年



四年を隔てしこと 十三年  
 五年を隔てしこと 廿五年  
 六年を隔てしこと 四十年  
 七年を隔てしこと 八十年  
 八年を隔てしこと 九十年  
 十年を隔てしこと 一〇一年  
 十一年を隔てしこと 六十年  
 十二年を隔てしこと 六十五年  
 十三年を隔てしこと 七十二年  
 十四年を隔てしこと 七十八年  
 十五年を隔てしこと 八十五年  
 十六年を隔てしこと 九十二年

十七年を隔てしこと 九十九年  
 十八年を隔てしこと 一〇六年  
 二十年を隔てしこと 一三〇年  
 二十三年を隔てしこと 一五〇年  
 三十六年を隔てしこと 一八〇年  
 四十三年を隔てしこと 二一〇年  
 四十六年を隔てしこと 二二〇年  
 中古以前の記録は何事によらず粗略を免れざれば以上の數も精細に調査すれば尙ほ之に倍する回数に達すべし此等の記事の較々精確になれるは徳川幕府創業前後來のことなれば最近三百餘年間に起りし大地震を毎百年間に區別して之を示すべし

● 第一紀は天正十三年(西曆1585)より貞享元年(1684)に至る一百年間に十



七回の大地震ありし、其中慶長元年の大震には伏見城大に破損し京都の大佛倒れ、清正の幽閉中秀吉を桃山殿に省せしが如き所謂地震加藤今に口碑に傳ふる所なり、次て慶長十八年冬の大震、寛永九年小田原地方の大震、萬治二年の京都大震に五條橋陥落し天和三年の日光地方大地震の如き最も著名なる地震なりし、第二紀は貞享二年(1685)より天明四年(1784)に至る二百年間に大地震十五回ありし中にも貞享十六年關東地方の大震、元禄十六年江戸地方の大震は最も烈しかりし、又寶永四年富士山の爆裂によりて關東に大地震を生じたりし、第三紀は天明五年(1785)より明治十七年(1884)に至る一百年間には二十四回の大震ありし、就中文化元年出羽庄内の大震には人畜夥しく壓死し、天保元年京都の大震、弘化四年信濃善光寺地方の大震に人畜多く死し、嘉永七年小田原地方の大震續て翌安政元年畿内及東海道西部の大震尙ほ

安政三年關東地方の大震に江戸の大惨害の如きは今も尙ほ人の其慘狀を語る所なり、故に過去三百年間に於ける我邦の大震は五十六回にして即ち平均五年九月毎に一回の大震ありし割合に當れ、其以後は明治二十年一月相模の大震、同二十二年七月熊本の大震、同二十四年十一月濃尾の大震、同二十七年六月東京の大震等ありしは人の知る所なり、輓近に至りては地震計の設置ありて微細の地動をも檢し得るを以て我國地震の回数は著しく増加し、東京に於ては毎年平均六十三回の地震ありて、五日三十二時間毎に一震する割合なり、尙ほ之を全國に徴する時は平均十年の地震回数は無慮六百五十一回の多きに達し、一日中に殆ど三回の地震を感じる割合に當る、豈に稀有の地震國ならずや、斯る頻繁の地震國に生長し、此の動搖多き土地に起臥する人民は、此の



天然力の爲めに如何なる影響を被るべきや、又何等の感化を與ふるや、吾々地震國住民は冥々の裏既に先天的に無地震國民が想像し能はざる一種の特性は其幾分を陶冶せられたることを思はざるべからず、凡て天然の地形風土が其人類社會の有形に感化を與ふことの絶大なるは世界各地の例に徴して知り得べし、印度人の想像力に富み恐怖驚愕等の情強きは總て彼の地自然力の壯大雄盛にして印度人の能力にては之を理解すると能はざればなり、又歐洲人の理解力に富み進取勇爲の氣象熾なるは其自然形勢か人類推理の範圍内に在りて能く之に打ち勝ち、天然力を應用し得ればなり、我邦に就て之を觀るに吾人を圍繞する自然界の優美にして淑婉なるは世の齊しく稱する所依りて以て我國の美なる歴史、我國の美なる風俗、我國の美なる習慣を養成したる事實は何人も許す所なれども、而かも又世間先憂の人士が常に我國民氣

質の欠點とし、弱點として警告する彼の沈重、忍耐、總て持久的性質に乏しき通弊は果して何邊より因襲由來せしや、固より多岐多因なるべしと雖ども、主として身邊を纏綿する天然力に服せざるを得ず、即ち地震作用の如きは確に其一に數ふべきものと信するなり、凡て人世最終の極言には必ず之を自然界に對比するは世の常なり、是れ人事は無常にして依頼するに足らざるを觀すれども、天地は確乎不變なるべきを信すればなり、例へば永久不變を誓ふに「天地と共に變ずることなし」と謂ひ、或は「天壤と共に窮りなし」と稱す、是れ天然なる自然の不變なるべきを信すればなり、又或は「假令へ江河逆流するも云々と誓ひ、或は「動かざること山の如し、又は「搖きなきこと大盤石の如し」と謂ふは皆山河盤石の不動を信じてなり、然るに地震の作用は果して如何、忽ちにして不變の地塊動き、忽ちにして江河逆流し、又は不動の山岳飛び、身を載する



地盤陷没し、其變の意外なること、左の詩意の如きものあり。  
 君不見、天地有時幾變更。苦樂不異世人情。江河亦應一朝涸。日月何必終古  
 明。嗚呼日月長。難照古鬼誰復弔。問天不答地無聲。小人痛哭大人笑。の趣あ  
 りて不時に幾多の生命財産を擧げて蕩盡し去るを以て、所謂世間一般  
 の小人は痛哭狼狽措く所を知らず、居常不安の情は知らず、識らずの裏  
 遂に養ひて性となり、苟且儉安事を永久に持續して其必成を期するの  
 性甚だ乏しく、總て我國民の性質として、熱は起り易くして亦醒め易し、  
 事は始め易くして遂げ難きの傾向はなきや、假令へ一些事と雖も我に  
 して若し成らざる時は之を子に傳へ、子にして就らずんば之を孫に傳  
 ふると云へるが如きは、甚だ稀なる所にして、世人の多くは必ず之を我  
 の一世中に遂げんことを冀ひ、只其成就の早からんことを願望するが  
 如きは、本邦人の通有性なるなからんか、之を一個人の些事とすれば尙

は可なりと雖も、個々の特性は國家の性質となり、何事も姑息となり  
 因循となり、所謂國家百年の大計を誤るが如きに至らば、豈に吾人の深  
 く寒心して慎重せざるべからざる所にあらざや、  
 回顧す明治二十二年帝國憲法を發布せられ立憲制度を採用せらるゝ  
 や未だ我國長足の進歩を認知せざる歐米人等は、東洋の新交際國が一  
 躍して立憲制度を築設せるを見て、是れ東洋に於ける文明制度の實見  
 場なり、黄色人種が立憲政治の適するや否やの試験ありとの群評齊し  
 く臻れり、特に某外國新聞の如きは我國の地震多きに乗じ、地震國は立  
 憲制度を行ふに適せずとて左の如く論じたり、  
 吾々は地震なる無形上の結果に注意を向け、日本現政府の官吏が新憲  
 法を編成するに當りて、日本全島と地震との關係を熟慮したるかを聞  
 かん、と欲する也、日本人は曾て東洋の佛蘭西人と呼ばれたれども、今日



は亞細亞の英人として知られ、一部分は英國風にして、一部は獨逸風なる憲法を採用するに至りしか、元來地震と議院設立との二現象は兩立する能はざるを以て、日本國民が議院の設立と同時に地震を減ずるを得れば、憲法も立派に運轉するを得るならん、諸立憲政體を行ふに必要なるは其國の人民が質朴節儉にして公共の徳に富むにあれば、地震は其人民の教化を妨ぐるものなり、凡そ道理なくして不意に起り、無残にも人間の生命及び財産を破毀するも、之を豫防する能はざる不幸は其地に住する人々を零落せしむるものと謂ふべし、世人の知る如く、人民は地震を除き其他の不幸に慣るゝを得んとも、地震のみは然らざれば地震國に住する人民は一般に氣輕なるものなり、何となれば今日無難なるも明日は天變の爲めに繁華なる都府も變じて湖水となり、住民は全く滅亡するかと思へば、翌朝の事に付苦心するの必要なければな

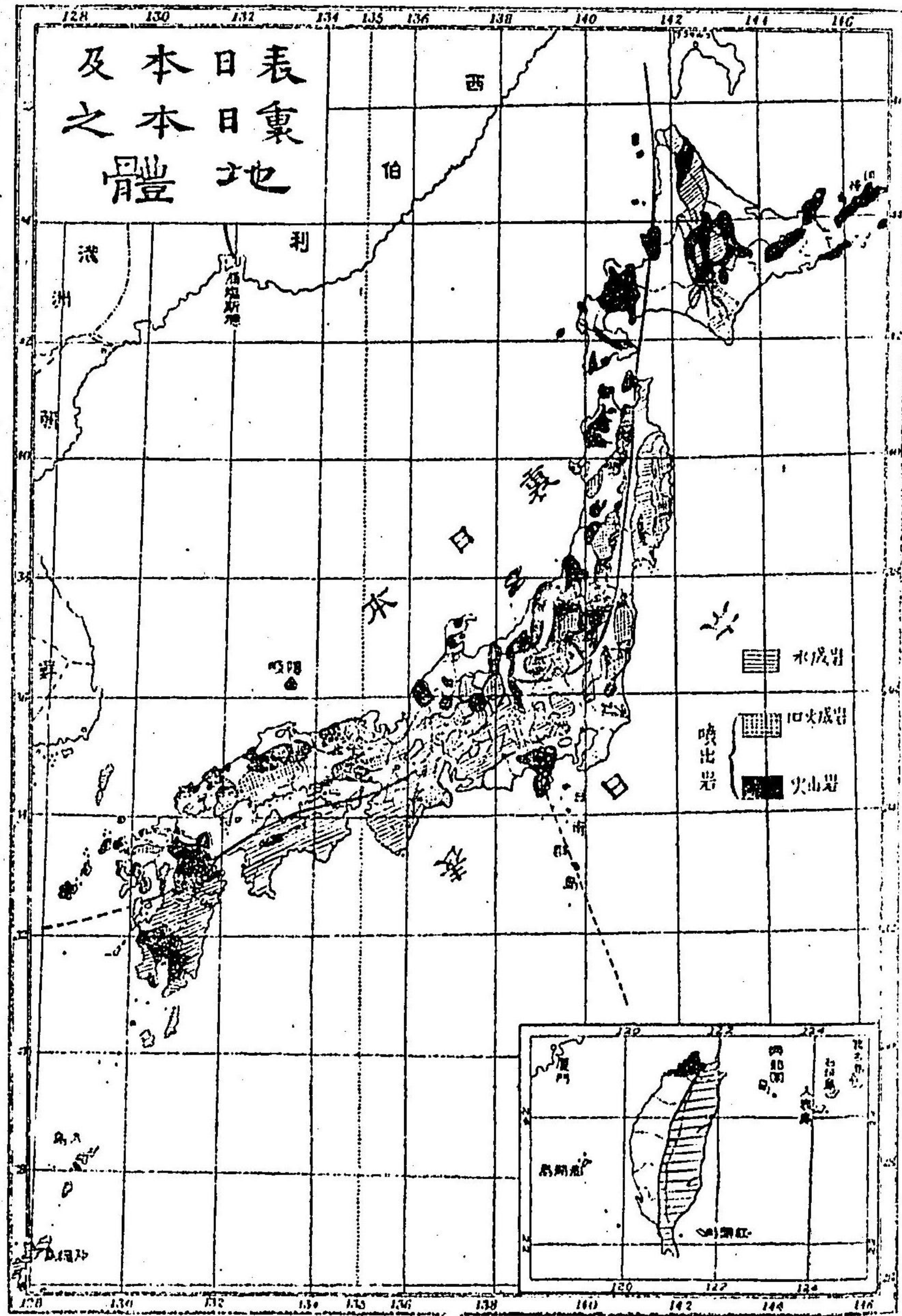
り、然かのみならず其地の人民は徳義心も薄く迷ひ易くして、實際王政維新前の日本人と同一様の境遇に陥るべし、日本にては維新以來此氣輕にして氣樂なる人民を英人の如く質朴にして責任を重する種族となさん爲めに種々の計畫を廻らし、遂に憲法を發布し代議制度を實施せんとするに至れり、方今歐洲の地震なき國々に於てさへも、哲學者が代議制度は果して人生最良のものなりやを疑ひ始めれば、同制度は全く火山國に適當せずと云ふも過言にあらざるが如し、吾々は日本政治家が此問題に考を及ぼせし證を得れば安心すべしと雖ども、其然らざりしを恐るゝなり、抑も天然力は一國民をして、一國民たらしむるに有力なるものなり、而して人間の支配する天然力は之を變化するを得べしと雖ども、未だ何人も地震を支配することを知らざるが故に、日本人は日本島が地震の難を免るゝまで、憲法より幸福を享くることな



かるべし云々、斯の如きの評論は固より失當無稽の不祥言にして、其論旨たるや只單純に地震國なるか故に立憲制度を行ふに適せずと言ふに過ぎずして却て立憲制度に必要な地理的資格即ち邦國の位置、國土の廣袤、國內の人口、邦土の形勢及建國の歴史の如きは、全く之を忘れたるものゝ如し、我國に於ける立憲制度に對する此等の地理的資格は悉く之を具備するは勿論、新制度實施以來の經歷は既に充分彼等の目を箝するに餘りありと雖ども、而かも吾々地震國民たるものは屢々此評言を省鑑して我國民の通弊を矯めざるべからず、地震國の住民は不意の地妖の爲め其氣質は輕躁なり、無責任なりと謂へるが如きは我國民の行動に鑑みて深く慎重せざるべからず、代議制度の下に在りて大政參與の權ある人民は重厚ならざるべからず、責任を重せざるべからず、何人も地震

を支配することを知らざるが故に日本人は日本島が地震の難を免るゝ迄は憲法より幸福を享けることなかるべしとの一段に至りては、夙に我帝國議會は震災豫防調査費の支出を議決して既に斯道の委員を設け今方に實査中にあれば世界人智の未だ明に究め得ざる地震の原因及其兆候を前知し、之を豫防するの術は必ず我國の發明に俛し、而して地震國も尙ほ代議制度に適せざることなしとの反證を示すは、實に我帝國にあるべきを信ずるなり、要するに我國は世界稀有の地震國なり、従つて住民は其氣質の上に於て幾分か其作用に感應して二三欠點あるを免れず、然れども我國土地の地理的優勝なるを以て、彼の無震國民が妄りに想像するが如き輕躁浮薄なる無謀民にあらざるは萬々なりと雖ども、又木に内に省みて地震國民の陷易き通弊を除去せざるべからず、特に東洋絶無の立憲制





度を建て、亞細亞幾多の邦國に其模範を示すべき地位に立てる國民  
 は、重大の責任あるを覺悟せざるべからず、明三十五年は既に第六期衆  
 議院議員の總撰舉に際せり、世界の耳目復た必ず我國民の行動に注集  
 すべし、立憲國民の行動は飽くまで立憲的なりざるべからず、彼等環視  
 者に地震國民の非立憲的行動なりとの口を籍すべからず、  
 世の中は何の常なる飛鳥川  
 昨日の淵はけふの湖になる  
 噴出岩  
 火成岩  
 水成岩



表 日 本 及 裏 日 本

表日本、裏日本とは如何、是れ我國自然的區劃にして、風土的名稱なること、猶ほ關東關西の特稱あるが如し、抑々關東及關西は我國土を横に兩斷せる名稱にして、則ち北日本及南日本の異稱なりき、而して我國土を縦に兩斷するものは表日本及裏日本にして、即ち太平洋沿岸及日本海沿岸の異稱なり、關東及關西に於て、天然上及人事上各特種の性格を供ふるが如く、表日本及裏日本に於ても亦天然的及人事的に於て、特種の性格を供ふるを見るなり、其地勢に就て、其地形に就て、其氣候に就て、其發達に就て、將た其人物に就て、如何に差違あるかを觀よ、我國の地勢たる東北より斜に西南に延長せる弓形の島國にして、東南は太平洋に面し、西北に日本海を抱けり、而して此の弓形の地勢に沿ふ



て一列の脊梁山脈其中央に縦走して、その國土の形體を構造せり、而して太平洋方面の地形は總て進勢を示し、地勢の大體に於て東南に擴出し、其半島岬岬皆海に向て飛はんとせり、是れ即ち我國の外彎たるべき方面なり、翻りて日本海方面を視れば其形勢總て受動的を示し、海岸の大體に於て弓狀に彎入し、其半島岬角に於ても能登の一角を除く外著しき突出なし、是れ我國地體の内彎たるべきものなり、此内彎地體と外彎地體とを分界するに國土の中央を縦走する中央線なるものあり、此線西は肥後西岸の八代沿岸より起り、肥後日向及豊後を横きりて豊後海峡に出て、伊豫佐田岬の北に沿ふて一直線に伊豫海に出て、其南岸に沿ふて讚岐及淡路を横きり、和泉大和を横斷して伊勢海に渡り、北々東に轉して矢作川道及天龍川上流に沿ふて富士帯に達せり、又北日本の中央線は宗谷岬の西側より北海道の中央を横斷し、襟裳岬に達し、本洲

に於ては尻矢崎より北上河道及阿武隈河道を走りて關東平原に出て荒川上流を溯りて富士帯の東側に至る、此の顯著なる接合線の存在は地圖を開けば何人も明に認識する所にして、是則ち表日本及裏日本の分界線たるべきものなり、中央分界線より東南側なる邦土は太平洋に面して、并が風化を受く、又其西北側の邦土は日本海に向ひて、并が風化を受く、其東南側邦土は地質上我國地體の表面に屬すべき地にして、地質は概ね沈澱層なる水成岩を以て成り、地勢は尙ほ進んで太平洋波上に向つて發育せんとするの勢を示し、其沿岸は現に土地隆起して漸次海面を埋却し、新地生成の例乏しからず、是れ則ち地體上表日本たるの特質なり、之に反して其西北側邦土は我國地體の裏面に屬し、其地質は噴出質なる火山岩に富み、地盤錯雜して弱點多く、常に日本海の爲めに浸蝕せられて土地陷没の



遺蹟多く現に其沿岸の土地は往々陷落沈降する例あり是れ則ち地體上裏日本特有の資質とす。其の故は、山脈の隆起、表日本對裏日本に於ける氣候上の差違は尙ほ一層著しさを覺ゆべし。表日本の氣候は太平洋的にして風向溫度雨量等總て南來の感化を被り、而して裏日本の氣候は日本海的にして總て北來の感化を受く、更に表日本は海洋的氣候にして、黒潮暖流の上を吹き渡れる、和藪なる南風の爲め寒暑頗る平和なれども、裏日本は大陸的氣候にして亞細亞内地を吹掃せる凜烈なる北風の爲め寒暑頗る懸隔せり、表日本は天氣概して晴朗の日多く、冬期に於ては日又日爽快暖和の好晴なるに反して、裏日本は曇陰の天氣多く、冬期に至れば凍雲常に漠々として空を蔽ひ、日として雪花を飛ばし若しくは寒雨ならざるはなく、因りて人生の活動營作を妨げらるゝこと甚なからず、彼の鬼柴田をして積雪を叱咤せし

めしと謂ふも無理ならぬ事なりき、而して此晴雨の分界は明に國の中央を縦走する彼の脊梁山脈にあり、冬期若し脊梁山脈の頂嶺に立ちて表裏を觀望すれば、表日本の青天白日に引き換へ、裏日本の陰雲綿々として天を蔽ふを見るべし、表裏に於ける晴雨の差は毎冬期に於て之を證するを得べし、一例を示せば明治三十年の冬期に於ては東京にては十一月二十三日の降雨より年末に至る三十八晝夜間、雨滴を見ざるに反して、裏日本沿岸は此間大抵雨雪を降らしたり、右三十八晝夜間に於て只雨雪を報せざりし日數は、山形に於て七日間、伏木、秋田に於ては六日間、新潟、金澤に三日間、福井、輪島の如きは、屢々二日間なりしのみ、故に其雨量も頗る夥しく、裏日本各地は何れも百二十耗以上に達し、多き所は五百耗に垂んとせり、而して其量は概ね降雪なるを以て積雪甚た深く屢々丈餘を數へし所あるに至れり、然るに表日本各地にありては







するに難し故に住民生活の原料は重もに南方山地に仰ぐを優れりとす。然るに古來我國の競争場は常に表日本にあつしを以て裏日本人士はして此競争場に入り衡を天下に争はんとする者は困難なる南上の通路を排して表日本の中央場裏に出ざるを得ず。是れ裏日本人士が天下争衡の危急に際して常に表日本人士に一着を贏せし所以ならん。前述數項の自然的諸事情の差異は更に人事的發達の上に影響し、表裏日本をして種々の懸隔を見るに至らしめたり。先づ社會發達に要する財源に就て之を觀れば著しく表日本の裏日本に優るを見るならん。其農産物に於て其工藝品に於て其水産に於ては皆裏日本の表日本に及ばざる所なり。只鐵産に於ては裏日本の地質錯雜なるを以て、表日本に優る所あり。故に富の程度も表日本は裏日本に比すれば稍々高く、生活の程度は裏日本は表日本より頗る劣れり。是を以て人口も常に裏日本より表日本に流入するの傾向を有し、人民住居の有様は著しく表日本に稠密にして裏日本に稀疎なり。即ち五千六百六十八方里の廣袤ある表日本に一千五百四十九萬の住民ありて、一方里に對する住民は二千七百三十四人なれども、裏日本は四千二百方里の面積に七百二十一萬の住民あり、即ち一方里に對する人口は一千七百九十一人なれば、表日本の人口は裏日本より稠密なること一方里に對し殆ど一千人の超過なり。従つて人事上の繁榮は常に表日本に行はれたり。繁榮の集注點たる都府市邑を將て、表裏比較すれば、頗る差異あるを見る。即ち表日本に於ては一等都市としては東京、大阪、名古屋、横濱、神戸、廣島の六大市あり。二等市としては仙臺、和歌山、堺、岡山の四市あり。三等市には盛岡、水戸、宇都宮、前橋、静岡、津、姫路、赤間關の八市あり。其繁榮の度は日を追つて進歩せり。裏日本に於ては皆て一等都市として唯一の金澤市ありし

本より表日本に流入するの傾向を有し、人民住居の有様は著しく表日本に稠密にして裏日本に稀疎なり。即ち五千六百六十八方里の廣袤ある表日本に一千五百四十九萬の住民ありて、一方里に對する住民は二千七百三十四人なれども、裏日本は四千二百方里の面積に七百二十一萬の住民あり、即ち一方里に對する人口は一千七百九十一人なれば、表日本の人口は裏日本より稠密なること一方里に對し殆ど一千人の超過なり。従つて人事上の繁榮は常に表日本に行はれたり。繁榮の集注點たる都府市邑を將て、表裏比較すれば、頗る差異あるを見る。即ち表日本に於ては一等都市としては東京、大阪、名古屋、横濱、神戸、廣島の六大市あり。二等市としては仙臺、和歌山、堺、岡山の四市あり。三等市には盛岡、水戸、宇都宮、前橋、静岡、津、姫路、赤間關の八市あり。其繁榮の度は日を追つて進歩せり。裏日本に於ては皆て一等都市として唯一の金澤市ありし



も、今や一等市の繁榮を維持すること能はず、既に二等市となれり、金澤に次では新潟、富山の二市あるのみ、三等市には弘前、秋田、山形、米澤、高岡、福井、鳥取、松江の八市あり而して其繁榮進歩の度は、迥も表日本市邑進歩の比にあらざらん。

我國歴史を緝けば古來各時代に於て表日本の土地より英雄雲の如くに起り、俊傑星の如くに輩出せしに拘らず、裏日本は其面積表日本の五分の四を有する土地なるに拘らず、本邦歴史の主公となり、司動者となりて、大に興廢の數に干與せし人物眞に寥々たるを感ずるならん、太古出雲派系統の諸神々以來は、元龜天正年間、に於て唯一の上杉不識庵ありて、裏日本人の總代表者たるを見るのみ、固より南朝の名和長年、戰國の尼子勝久、山中幸盛、學者としては平田篤胤、佐藤信淵、伴信友、僧澤庵名君、上杉鷹山、松平春岳、若くは遠征家、錢屋五兵衛、志士橋本景岳、梅田雲

濱雲、井龍雄等の諸俊傑なきにあらざりしと雖ども、決して表日本の十か一にも値ひするに足らざるべし、之を想へば本邦歴世の經營活劇は殆ど表日本人の獨舞臺たるが如き觀あると共に、轉た裏日本の寂寥索寞を感ぜずんば、あらず、是に於て天然上の裏面は亦人事的裏面たるを知るべし。

然らば裏日本は將來にも亦幾久しく人事的裏面として荒涼閑散の地たるべし、豈に其れ然らんや、夫れ人事は活動あり、變遷あり、過去の裏面豈に將來の表面たるべきを期せざらんや、語を寄す裏日本一千八百萬の人士よ、世界の大陸は如何に變遷の動機を示しつゝある乎、其の方針、東平西平、將た南北平、兎に角大勢動して止まず、今や此の大勢の變遷に伴ふ日本は決して過去の如き日本的獨個の變遷を許さずして、必ずや世界的變遷ならざるべからず、世界交通の有様が現今の如き海洋交



通時代にありては從來我國の世界的交通は海洋の方面廣き表日本の諸港に據らざるを得ざりき表日本の繁榮特に横濱神戸の生長は一に是れに伴ひたる成長なりき然るに今若し世界交通の幹線が海路を棄て大陸に遷らば如何浦鹽斯德若くは朝鮮の釜山より汽車に搭し鐵路夢を滅して滿洲の廣原を横ぎり西伯利の平野を一貫して直に歐洲の各都府に到着し得るの時來らば如何其旅行日程の半以下に減するに拘はらず又其危險の比較的に輕減するに拘らず我國の旅客貨物は相換らず表日本の各港より汽船に乘し支那海を經印度洋を經紅海を經而して地中海を過くるの方針を取るべきか試に觀よ東海道鐵道一たび開通して遠州洋の旅客を減じ山陽鐵道の開通によりて瀬戸内海の通過をさへ減むたるを見ば思ひ半に過きん然らば則ち果して其時代に及んで我邦の世界交通の集中點は如何なる地點に遷るべき乎固

より裏日本各地にあらざるべからざるは言を待たざる所なり新潟乎敦賀乎宮津乎能代乎酒田乎境乎伏木乎久美乎將た濱田乎然り此等の各港皆將來多望と謂つべし然れとも過去の世界繁昌史に徴して之を觀よ歴山港アレキサン德里ヤの繁昌は歴山大王の熱心なる計畫と住民の精緻なる用意とによりて世界の繁榮を招致したりピザンチン府の繁榮は土耳其人の疎惰なる待遇によりて逸去せりサエニス人は十字軍によりて西部歐洲の通商が活氣を帯びたる動機に投合して地中海通商の全權を掌握したりリスボン市の中央市場たる資格は國民の不熱心と迂遠とによりてアンペールスに奪はれアンペールスの中央市場は機敏なる阿姆斯特ダム商人に奪はれ阿姆斯特ダム府の世界貿易主場權は更に用意周到なる倫敦府民に奪はれたるにあらざるや裏日本人士たる者豈に異居逸遊の秋ならんや裏日本人士たる者豈に袖手傍觀の秋ならん



や。今や浦鹽埠頭汽車の軌音を聞き釜山浦上又將に軌道の敷設を了らんとす。



浦鹽埠頭汽車の軌音を聞き釜山浦上又將に軌道の敷設を了らんとす。今や浦鹽埠頭汽車の軌音を聞き釜山浦上又將に軌道の敷設を了らんとす。今や浦鹽埠頭汽車の軌音を聞き釜山浦上又將に軌道の敷設を了らんとす。

白山

白山氣象雄。長瑞懸日接蒼穹。氷池光散千年雪。草木香翻萬古風。五葉松間靈鳥舞。三頭神處羽仙通。最高頂上回頭立。無限乾坤活玉中。』とは故人雨森之質翁の白山を詠する詩なり、實に白山は本邦に於て富士に亞ぐ名山とし、北陸第一の雄山とせり、されば古來京都の尊き邊よりの眷顧も薄からざりし、昔は越前加賀飛騨の三國に跨れりと云ひしが、牛首郷の加賀領となつしより今は越前には關涉なきことなれり、其頂上の位置は北緯卅六度七分東經百三十六度五十分にあり、八合目以上は火山岩なれども、其狀自から他の火山の看と異にして、截尖圓錐體狀をなさず、是れ中古紀層の高山中に噴起して古岩其岳脚を連掩するが故なるべし、西北は日本海に而し爰を距ること大約十五里あり西方日本海と



本山との中央に、海拔三千〇〇九尺に及ぶ谷峠あり、其中間なる峡谷を  
舊牛首郷とす、即ち本邦中有名なる深雪地として、山抜千六百十四尺あ  
り、名蹟考を按ずるに、牛首は極めて山深き所にして、冬月雪多きふる故  
に、此村の豪家十郎右衛門などいへる家をはじめ三階作り丈夫に建置  
き、屋上の雪を掃ふことなく、雪のつもるに従ひ、三階三階と次第に上へ  
登りて住居すといへり、細民の薪食の貯乏き者は、或は大家に寄宿し、其  
壯年のものは、或は伏見大津などへ行き、冬かせきをなすもあり、又平日  
山小屋などに居住する老少婦女の類は、福井に出て食を乞ひ、雪の消ゆ  
るを待て郷里に歸る云々とあり、此牛首より登ること三里餘にして、市  
の瀬村あり、村を距る八町にして、炭酸泉涌出す之を白山温泉と云ふ、湯  
本に於て高さ二千六百八十六尺あり、此邊より迤西谷峠を越へて勝山  
市に至るまで皆中古紀の岩石にして、湯元を流るゝ柳谷川に沿ふて湖

れば山葵谷と稱する所あり、口中奥の三溪に分る皆貝石木葉石等中古  
紀の末葉に發生せし動植物の化石を砂岩石板岩中より産す、因りて化  
石谷の異稱あり、湯元より登れば六萬山、槍ヶ岳、指尾等の諸峰を越え、斜  
面甚だ急峻にして、傾度三十度以上に及ぶ所あり、此邊は日本植物第三  
帯に屬する山毛櫸、扁柏、羅漢柏等、蒼鬱として茂生し、晝尚ほ暗し之を過ぐ  
れば、傾度稍々緩なるも、立巖恰も削るが如く、左は柳谷川の深谷に臨み  
右は湯谷川の深溪あり、途上剃刀窟、仙人窟等、中古紀の奇巖道を要して  
突兀たり、道路の高さ六千三百二十六尺の上にありて、植物帯は方に二  
層を進み、第三帯の植物跡を收め、第四帯に屬すべき白檜、たけのみ、等之  
に代れり、畜生谷、真砂坂など云へる峻坂を經れば、彌陀原と稱する海  
抜七千八百六十一尺の高原あり、此原は即ち中古紀岩及び火山岩の間  
にありて、火山灰の堆積より成れり、廣き方半里許、原上は黒百合花、蓋草



等を初とし種々の草花婉麗として咲亂れ盛夏恰も仲春の看あり而して爰に至れば氣温も亦大に降り下界炎風水を呼ぶの日尙ほ置に攝氏十五度の間を昇降せり渡邊祐尚白山の句に「花有、四時、色、山無、三伏、熱、朝來出、岫、雲、飛、作、暮、天、雪、」一層の味を覺へたり此高原は植物分賦第四及第五帶の境域にして是より以上は其名も五葉坂と稱し五葉松と同種ある彼の樹木發生極帶の特産なる偃松を以て滿山を掩はれ其間に鶉鳥の人珍しげに飛鳴する光景は全く下界の風色と異れり高さ八千一百〇六尺の所に室堂あり入りて爰を取べく休憩すべし是より登るに従ひ大噴火の遺蹟歷々として存し火山岩は突几として偃松の間に横はり愈々登れば愈々多く終に偃松も跡を絶て只燒石の磊落として堆積し處々に殘雪の斑々たるを見る最頂嶺を御前岳と云ふ海拔八千八百〇四尺ありて氣温は盛夏十二三度の間にあり即ち下界三月の温度に

似たり眼下に火口湖三個あり何れも圓形或は楕圓形にして中央に水を湛へたり即ち古の噴火口なり此の火口を隔て、劍ヶ峰あり奇巖聳立すること約百三十尺頂上は恰も五口の劍刃を列植するが如く人得て攀べからず其觀頗る豪壯とす其岩脚は噴火の爲めに岩石悉く燒爛して暗褐色を帯び往昔猛烟天を衝き轟震地を動かしの狀を追想するに堪へたり御前岳の正北約十町に當り奥の院あり御前岳を下り爰に至る途次千歳池あり同じく舊噴火口にして氷雪湖面を掩ひ道其上を通ず奥の院も亦火山岩の堆積にして頂上は稍々平地を存す岩脚に二個の舊噴火口あり東方なるは圓形にして大なり翠池と云ふ南方なるは稍々楕圓形にして手洗鉢と云ふ、  
雙眼鏡を取りて熟々四方を覗ふに本山は即ち白山火山脈の起點にして脈を西南に連ね東方は遙に富士に對し中間は飛驒高原を隔て、信











毒なりと雖とも大損害を被らしむべき大震は頗る稀なり、濃尾震災の如き稀有の激震にありては幾萬の人命を殞し、幾千萬の財産を蕩盡したりと雖とも此の如き激震は何十年目若くは何百年目に起るものにして、其當時の慘狀は實に酸鼻に堪へざるも、此の損害を何十年又は何百年に平均すれば其損害額は之に準して減少すべし、然るに我國暴風雨の災害は決して稀有の事にあらざるは、邦人の實檢に徴して知り得べし、我國の全版圖は恰も北太平洋の颶風帶中に位するを以て、暴風雨の多きは實に是非もなき次第なり、故に暴風雨の激烈なる慘害は毎年殆ど之を嘗めざるなく、最近の統計に徴すれば毎年平均十三回の暴風雨あり、其内六回は必ず巨大の損害を被らしむべき猛烈なる暴風雨たるべき割合なり、而して其發起する時期は全年を通して必ず時期を撰ばずと雖とも古諺に「二八月は可愛子の旅立ちさすな」と言へるか如く



陰曆二八月を以て最も暴風雨多き時期とす、是れ二月は寒候より暑候に移るの時期にして又八月は暑候より寒候に移るの時期なるを以て氣候變動の重要時節なればなり、中にも暑候より寒候に移るの時期は氣界に大變動を生じ、恐るべき颶風を惹起すること往々之あり、是れ世俗の所謂二百十日(九月八朔及二百二十日(九月十一日)の風厄日頃にして、九月初旬より九月中旬に終る時期なり、此の期日間は猛烈なる暴風雨の潜伏期とも稱すべく、毎年此期日間には殆ど我版圖内何れにか暴風雨の發起せざることなき恐るべき期日とす、明治九年來今年に至るまで九月中に起りて巨害を被らしめたる暴風雨期日を示せば左の如し

- 明治九年 九月十七日 十八日
- 明治十年 九月十四日 十五日
- 明治十一年 九月十五日 十六日

- 明治十二年 九月十三日 十四日
- 明治十三年 九月十五日 十六日
- 明治十四年 九月十三日 十四日
- 明治十五年 九月十三日 十四日
- 明治十六年 九月十三日 十四日
- 明治十七年 九月十五日 十八日
- 明治十八年 九月五日 六日
- 明治十九年 九月十七日 十八日 廿四日 廿五日
- 明治二十二年 九月十二日
- 明治二十三年 九月十三日 十四日 十五日
- 明治三十四年 九月十四日 十五日 三十日
- 明治三十三年 九月廿三日 廿四日



明治二十七年 九月十一日 十二日  
 明治二十八年 九月七日 八日  
 明治二十九年 九月九日  
 明治三十年 九月六日 七日  
 明治三十一年 九月七日 八日 廿四日 廿五日  
 明治三十二年 九月十九日 廿日  
 明治三十三年 九月十九日 廿日  
 明治三十四年 九月なし

以上二十七年間四十六回の内九月上旬に屬するもの九回同しく中旬に屬するもの三十九回又下旬に屬するもの八回なり故に統計の成績より言へば本邦に襲來する猛烈の颶風は九月中旬に最も多く又日子を以て言へば中旬に於けるに十九回中十八日にあるもの三回十七日二回十六日二回十五日六回十四日七回十三日五回十二日二回十一日

一回なるを以て九月十四日は實に暴風多き頂點にして前後なる十三日十五日の置々たる三日子を以て十八回即ち殆ど半數を占むるを以て我國の三風厄日を二百十日八朔二百二十日と言はんよりは九月十三日十四日十五日を以て新三風厄日と稱するの至當なるを信ずるなり

我國に襲來する暴風雨の發起點は大抵比律賓群島の東方海中即ち北緯十七度東經百二十五度の邊にあり猛烈なる颶風は是を發生點として或は東北に或は西北に進行すれども必ず北方進路を取るは免れざるなり其進路の著しきものは四種あり(一)發生點より北西に向て支那海に入り或は臺灣を横きりて支那内地に進入するもの(二)發生點より直に北進して東海を経て九州に達し中國を経て日本海に出て北東に駛走し去るもの(三)發生點より北東に進み直に我南海岸に達し本州を横



過して日本海に出て或は本州内陸に沿ふて北海道に入り遂にオホシ  
ツク海に出づるもの(四)發生點は詳かならざれとも西伯利亞の南部を  
通過して北海道を一掃するもの通常以上の四進路を取るものとす、  
近例を擧げて以上の四進路を示せば明治三十四年八月下旬臺灣を荒  
したる暴風雨は正に第一進路に屬するものにして臺灣海峡を過ぎて  
支那内地に入り又第二進路は二十四年九月十四日より十五日に亘  
り殆ど全國を荒らせし猛烈なる暴風雨にして始め鹿兒島に突進し來  
つて九州を横さりて中國に達し遂に日本海に出てたり次に第三進路  
は明治三十一年九月六日濱松に突進し來り我東半部を蕩掃せる暴風  
雨にして最も探例に適するを以て下文に聊か之れか説明を試みんと  
す第四は明治廿八年五月十八日壽都に襲來し北海道を通過したるも  
のなり以上の内第一進路を取るものは臺灣に止まり又第四進路は北

海道に限るを以て我國の損害甚だしきに至らずと雖とも第二及第三  
は我國重要な部分を襲ひ且つ内陸に沿ふて駛るを以て損害最も甚し  
きものとす、  
暴雨の二運動即ち中心の移動及中心に吹入する旋廻は緯度に應じて  
同一ならず中心の移動は低緯度に遅緩にして高緯度に進むに隨ひ漸  
く迅速となる通常は速度は發起點附近に於ては一時間に七八海里の  
割合を以て進めとも臺灣及琉球邊に於ては九海里或は十海里となり九州  
に達する時は十四五海里を進み以北に於ては二、三十海里日本海に出  
て、四十海里北海道に及べば五十海里稀には六十海里を駛走すると  
あり之を以て低緯度に於ては暴風吹荒の時間長く北に赴くに隨ひ暴  
風時間短きを以て被害の度も之に應じて多少あり、  
低氣壓中心に吹入する旋廻は即ち暴風の猛威にして樹を抜き屋を倒







しを示せり、爾來暴風雨の中心は遠州洋より北東に向つて進み來るが如く、中部各地の晴雨計は急降を始め、同日午後十時に至り暴風雨中心は果然濱松を襲ひ來り、晴雨計は激降して終に七百十八耗の最低に達したり、之を中心として附近の氣壓も亦大に減じ、同壓線は完全なる螺旋形を畫するに至り、風力は何れも猛烈なる旋廻狀の颶風又は烈風に於ては濱松に於ては一秒時三十四米に達し、夥しき降雨を伴へり、挿圖に示す天氣圖は即ち此時全國の氣壓配布天候風力を現せるものなり、是より中心の進路は尙北東を取りしを以て信濃甲斐を経て七日午前三時頃前橋附近に達せり、此頃東京に於ては最も其暴威を感じ、午前二時三十分七百四十三耗の最低となり、風力又最強度に達し一秒時に四十二米を駛れり、此風壓は一問四方一坪毎に百九十一貫餘の割なれば塙等は之れか爲めに壓倒せられたり、而して中心は同午前六時福島に

達し、是より陸前陸中の海岸に沿ふて北海道に渡り、風力は頗る減殺され、たれとも多量の降雨を伴ひしを以て、北海道に經驗なき強雨を降らし、上川に於て九十耗を數へたるを以て、石狩川其外諸川漲溢し、甚しき水害を被らせたり、是より中心は十勝、釧路、根室を過ぎ、七日午後四時北海道を離れてオホーツク海に駛走し去りて、九州の西部は高氣壓に復し、全く秋季の氣壓配布となりて天候全く定れり、該暴風雨は其中心の深度頗る深く、曾て我國に於て測定し得たる最低氣壓即ち明治二十四年九月十四日長崎の七百十三耗より高きと置に五耗なり、又該暴風雨の中心は濱松より内陸を進行せるにより、充分の觀測を遂げたるを以て暴風雨の例として最も適切なる標本となるべし、又中心の濱松を襲はんとするや、東南東の風位なりしが中心に入りて稍々風力を減し、中心の去るや直に風位一轉して南西或は西風を感じ



たり、是れ暴風中心經過の常狀を現はせり、又中心移動の進度は濱松以東は一時間四十哩の速度を以て進み、其針路は北緯三十度乃至四十度に普通なる北東の進路を取れり、且つ中心の先頭には非常の水蒸氣を帯び、至る處強雨を降らし中心の後方に於ては天候漸く回復して概ね晴天又は快晴となれり、然れども中心の内陸を經過せしを以て、到る處暴威を逞ふし暴雨を降し、名古屋以東は一として其害を被らざる所なく、其被害額は亦甚だ夥しかりし。

我國暴風雨の損害の震害に倍蓰すべきは前に少しく説けり、最近の統計に徴すれば最近十餘年間に襲來したる暴風雨の總數は百廿四回なり、其内最も災害を及ぼしたるもの六十三回、即ち毎年六回以上の割合なり、是を以て其損害も亦頗る夥しく、毎年暴風雨より被る損害平均額は左の如きものあり。

人の死傷 二千五百四十二人 畜類死傷 千二十五頭 家屋の  
 破壞 二百七十四萬千四百二十戸 土地の荒廢 三十萬六千六  
 百六町歩 船舶の流失 四千六百五十六艘 橋梁の流失 二萬  
 六千三百八十八個

此他被害の甚しきは農作物にして、特に稻禾は花を開き實を結ばんとする最要時期にして、實に國民の飽歎に關するは邦人の能く知る所なり、其外堤防の決潰鐵道の破損等、直接間接の害は尙多數なるべし、是れ毎年に生すべき損害額なりとは豈に驚くべきことならずや、明治廿四年濃尾の野大に震ひ一大慘事を惹起するや、舉國人民の痛哭憐察一方ならず、帝國議會は驚て震災豫防調査費なるものを議決し、此恐るべき慘害の由て起る所の理を究め、其災害を豫防せんとの舉ありしと雖も、而かも其災害尙之に倍蓰すべき暴風雨豫防のことに説及せるもの







### 晴れの半面・雪の半面

日本氣候の現象中、最も顯著なるものゝ一に數ふべきは冬期太平洋に濱する表日本各地の晴天、日々打續き乾燥爽快なる天氣なるに引換へ日本海に面する裏日本各地の多濕にして陰雲滿天、六花霏々として飛び或は雨、或は霰、或は霰、日又日、實に陰鬱なること是なり。されば此季節に於ける我國氣候の景況を形容すれば『晴れの半面、雪の半面』と謂ふべき有様なり。

元來我國氣候は準熱帶性を帶ひ、稍々判明なる乾節及雨節の兩期に分別せらるべし。即ち寒候半年は雲雨の跡收りて濕氣少く、一般に乾燥なれども、暑候半年は雨脚頻繁にして陰濕なり、特に春雨期はるさめ、梅雨期(ゆめ時雨期)しぐれの如き、我國固有の雨節なり。斯の如く乾節雨節に



分るゝ所以は全く我國に流行する定期風の方位に基くものにして暑候には西南位の濕暖にして多濕なる氣候風吹き之れが爲めに此風の流行する地方は露霖連旬に亘るを常とす。又寒候に及べば北西位の風向と變じ表日本に於ては此風を雨無風(わなせ)と稱し、晴朗連日爽快の期節となるなり。斯の如く此風期間表日本の晴朗なるに拘らず、裏日本に於ては暑候の露霖に續きて再び陰鬱の期に入るべし、而して此節の露霖は裏日本に於ける年中の最露霖期にして、殆ど晴天白日を仰ぐは稀あることを覺悟せざるべからず。

何故に寒候表日本の晴朗なるに拘らず、獨り裏日本の露霖なるやと云ふに、此節亞細亞の中央内地に起れる高氣壓部の大氣は八方に溢流し、其北西位を取りて轉流する氣流は、西伯利朝鮮の海岸を離れて日本海に渡るに降し、其蒸發する水蒸氣特に日本海の東南部を北東に流通す

る黒潮の支流なる對馬暖流ありて其蒸發する多量の水蒸氣を含蓄して之を齎らし、先づ裏日本を衝きて凝集を始め、或は雨となり、或は雪となり、つゝ尚ほ南東に進めば地勢は一進は一進と高度を増し、遂に其後方を擁する障壁の如き高峻なる中央連嶺の横斷するに觸着し、之れが爲め此風に含蓄する濕氣は此連脈に遮斷せられ、冬期の如き露點の低き時にありては其水蒸氣は此高山脈を卓越するを許さず、含有せる濕氣の全量は大率此山脈以内に降らせ、此連脈を卓越する時は濕氣は既に多く絞り取られて乾燥となり、山脈以外の表日本に達する時は雨雪の材源涸竭し盡きて、所謂雨無風となるものなり。

されば中央連脈以内の裏日本各地に於ては、此期間の降水量は頗る夥しく、而して其降水は嚴寒の候にあるを以て多くは雪華となりて降るに、より、裏日本の積雪は甚だ深く、特に日本海の對岸最も遠隔せる地方



に於ては此多濕風を正面に受くるを以て、加越能地方の積雪は格別深くして、『北國の深雪』として夙に世に有名なり、海岸地に於ても三四尺の積雪を見、若し山間溪谷の幽地に於ては積雪一丈以上に達すること決して稀ならず、加賀國白山の高峰と大日岳と谷峠との間なる手取川上流の溪澗海拔四百九十二米の地點に牛首なる一寒村あり、是れ余が嘗て紹介せし如く恐らくは全國第一の深雪の地なるべく、一丈以上の積雪は毎年の例にして二、三丈にも及ぶことありて、毎年約五ヶ月間に亘る降雪期間は操業を休止せざるを得ず、其間細民は四方に離散して所謂牛首乞兒となり、人の憐を乞ひて融雪の期を待ちて歸村するを常とす、余嘗て該村の名主十郎衛門の宅に宿せしことあり、其家宅の構造實に奇態にして其堅牢なるは積雪に耐ゆる爲めなるべく、其高層なるは深雪に埋却せられざるの用意なるべし、此牛首地方を本邦深雪地の中

心とし、是より略ぼ東北に延き、信州飯山に達する一線と西南敦賀に達する迄延ける一線の附近は何れも積雪の最も深き地方なりとす、次に其北は秋田に達し、西は石州濱田に至る迄、後は脊梁山脈に及ぶ一帯即ち殆ど裏日本全體を以て深雪區域とす、  
裏日本積雪の深きは各地に於て實測したる毎年冬期の降水量によりて之を證し得べし、即ち各地の降雪期三ヶ月(一、二、三)ノ三ヶ月間の平均雨雪日數及平均降水量を示せば、金澤に於ては九十日間の内平均七十六日の雨雪にして其量八百二十六糎の最多量なり、福井は七十五日間の雨雪にして其量七百九十六糎、次は伏木の七十五日間の雨雪にして七百三十八糎、輪島は七十四日間雨雪降りて五百五十四糎の量に達し、新潟は雨雪七十九日間にして晴天は僅に十一日に過ぎず、而して其量は五百四十三糎、境は七十一日の雨雪にして五百二十二糎の如き何



れも夥しき量あり尙ほ左翼となる石州濱田に於ても六十三日の雨雪にして八百八十三糎あり右翼たる秋田に於ても七十七日の雨雪にして三百八十六糎の雨雪量あり。金澤の降水量の如き之を我尺度に改算すれば實に二尺七寸餘の積水量にして今之を積雪量は積水量の八倍として換算すれば二丈一尺八寸となる。福井は二丈一尺の積雪にして伏木は一丈九尺五寸。輪島は一丈四尺六寸。新潟は一丈四尺三寸。境は一丈三尺八寸の量に及ぶべし。濱田に於ても七尺五寸。秋田も一丈二寸に及ぶべき割合なり。固より此期間の降水盡く雪とのみ限るにあらず多少の降雨もあるべく又多少の融解蒸發等の量ありと看るも積雪の量畧々想像し得らるべし。故に裏日本各地の冬期三ヶ月間の降水量は多きは八百二十六糎。雪量とすれば二丈一尺八寸の多量あり。又少きも二百八十三糎。雪量とす

ば七尺五寸の量あるものにして天氣も亦九十日の中、七十九日間の雨雪にして、塵に十一日間の晴天より六十三日間の雨雪と二十七日間の晴天あるものと覺悟せざるべからず。頗る陰濕多雪の地と謂ふべし。斯の如く冬期裏日本各地の陰鬱多雪なるに引き代へ表日本は如何。表日本は所謂「晴の半面」にして中央山脈を越えて其以南に入れば天氣忽ち開霽し、此期間は雨雪の煩少なく、天氣大抵日々晴朗にして人々青空を仰ぎ日光に浴するの快を得べし。而して陰鬱の度は中央山脈を越えて太平洋岸に近づくに隨ひ次第に減少すべし。即ち日本海岸とは塵に直徑五十糎(約十三里)を隔つる長野に至れば雨雪日は五十二日と減じ、其降水量も僅に百五十四糎即ち五分の一以下に減量す。其附近各地も大抵之れと同様なり。又既に日本海岸より百五十糎を隔つる宇都宮に至れば降水量は百四十三糎となり、雨雪日僅に十九日に過ぎざる



に至れり又福島も百五十八耗にして三十八日の雨雪日なり又東京に於ても百八十二耗の雨雪量にして二十三日間の雨雪日なり何れも裏面に比すれば量に於て五分の一雨雪日に於て三分の一以下なり又秋田海岸と表裏をなす陸中海岸の宮古に於ては百八十三耗の雨雪量にして二十七日間の雨雪あり石巻は百三十五耗の量にして二十九日の雨雪あり之を秋田の七十七日の雨雪にして三百八十六耗の量に比すれば三分の一内外なり山陰道の境濱田等の沿岸と腹背をなせる山陽道海岸に於ても亦同一様の現象なり岡山は百十七耗の雨雪量にして境の五百二十二耗に比すれば四分の一にして境の七十一日間の雨雪あるに比して岡山は二十五日間即ち三分の一なり廣島も百五十五耗の雨雪量にして廿八日間の雨雪なり神戸は百九十七耗にして雨雪日三十二日間なり尙ほ九州に於ても阿蘇火山脈より以北と以南と

に於ては冬期の雨雪量に頗る差異あるを見るされば冬期裏日本の雨雪と表日本の晴朗との現象は北東は北海道より西南は九州に達する迄日本を切半して正しく「晴れの半面雪の半面」を現はすべし此特殊なる氣候上の現象が晴れの半面たる表日本と雪の半面たる裏日本との政治上教育上經濟上及社會上若くは其他百般の人事上に及ぼせる影響は如何是れ頗る趣味ある研究問題たるべきを信ずるなり

明治三十五年一月六日寒入に際し東京の各新聞紙に載せたる各地の天氣電報を見るに「晴れの半面雪の半面」の現象亦歴々見るを得べきを以て試に左に之を採録せん(正午は正午の温度なり)

明治三十五年一月六日各地の天候

東京

快晴(十二月廿五日來)寒氣強

金澤

雪降る天候寒し

銚子

晴靜穩(前)氷點下一、三度

富山

雪降る(正)六、三度



冬期三ヶ月間表裏日本ノ雨雪日數  
並ニ雨雪量比較

表		裏	
日	本	日	本
宮古	二十七日  百八十三耗	秋田	六十三日  八百八十三耗
石巻	二十九日  百三十五耗	新潟	七十九日  五百四十三耗
福島	三十八日  百五十八耗	伏木	七十五日  七百三十八耗
宇都宮	十九日  百四十三耗	輪島	七十四日  五百五十四耗
長野	五十二日  百五十四耗	金澤	七十六日  八百二十六耗
東京	二十三日  百八十二耗	福井	七十五日  七百九十六耗
神戸	三十二日  百九十七耗	境	七十一日  五百二十二耗
岡山	二十五日  百十七耗	濱田	六十三日  八百八十三耗
広島	二十八日  百五十五耗		

表		裏	
晴	れ	雪	の
水戸	晴天微風(午)一四、五度	高田	雪降る寒氣強し(午)一三度
浦和	晴天(午)一一、二度	新潟	雪南西の疾風(前)氷點下〇、九度
宇都宮	快晴(前)氷點下五、二度	山形	降雪積雪五尺餘寒氣強し(前)氷點下三、八度
石巻	快晴西の寒風強し	秋田	曇北西の和風(前)氷點下五度
横濱	快晴北の疾風あり(前)氷點下六度	弘前	雪降り寒し
沼津	快晴北東の軟風(前)氷點下一、六度	福井	降雪午後霧る
静岡	晴天(午)一一、二度	鳥取	半晴稱雪尺餘寒氣酷し
濱松	快晴靜穩(前)〇、九度	松江	曇天寒氣洩し
和歌山	晴北西の疾風(前)四、九度		
神戸	晴北の疾風(前)二度		
岡山	快晴西の疾風(前)一、一度		
高知	快晴靜穩(前)〇、二度		
宮崎	快晴西の軟風(前)一、八度		